

令和5年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

東アジア文化の受容と千葉氏

—妙見像と貿易陶磁器からみた文化と権威—

令和6年3月

千葉市・千葉大学

千葉開府
Road to
900
since 1126



令和5年度 千葉市・千葉大学公開市民講座

妙見像と貿易陶磁器からみた文化と権威

千葉氏 東アジア文化の受容と

2023 **12月9日** 土

開催時間 13:00 ~ 16:10
開催場所 千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館大ホール

参加無料

募集人数：200名

申込期間

2023年11月 1日(水) から
11月17日(金) まで

❁ 講演 1 ❁

千葉妙見と真武神

講師：濱名徳順（仏像研究家・茂原市史編さん委員）

❁ 講演 2 ❁

千葉氏と鎌倉御家人の唐物

講師：小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）



参加申込はこちらから
（裏面もご覧ください）
千葉市立郷土博物館
043-222-8231

木造妙見菩薩立像（複製：千葉市立郷土博物館 原資料：東庄町）

主 催：千葉市 千葉大学 千葉市教育委員会 後 援：千葉日报社

〇 令和5年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 〇

東アジア文化の受容と千葉氏

― 妙見像と貿易陶磁器からみた文化と権威 ―



▲褐釉四耳壺
(猪鼻城跡出土 千葉市立郷土博物館)

千葉氏が氏神・軍神として妙見を信仰したことはよく知られています。千葉氏は妙見の姿として中国の道教における真武神の図像を受容しました。真武神は北方の神・玄武とされ、北宋の時代に真武と改められました。千葉氏は真武神像に基づく「妙見信仰」を浸透させることによって正統性を確立し、一族の団結を図ったのです。このような動きは、千葉氏が宋の文化を受容していたことの表れと考えられます。

一方、猪鼻城跡から12世紀に中国南部で焼かれた褐釉四耳壺が出土したのをはじめとして、各地の千葉氏関係史跡では、中国製の青磁・白磁といった貿易陶磁が多く出土しています。これらはステイタス・シンボル、威信財として、千葉氏の権威や権力を示すものでした。

本公開講座では、千葉氏や房総の諸勢力が「唐物文化」を持ち、中世の房総が「東国の都」鎌倉はもちろんのこと、京都、九州、さらに中国といった東アジアとも関係を有していたことに注目していきます。



▲白磁四耳壺
(長岡堂庭遺跡出土 四街道市教育委員会)

❁ 講演1 ❁ 千葉妙見と真武神

講師：濱名徳順（仏像研究家、茂原市史編さん委員）

平安期の妙見像は四手で片足立ちするものなど様々であり、それは運命神としての性格を具現化したものでした。一方、千葉氏はその性格を引き継ぎつつも、戦場で勝利をもたらす中世的な軍神（いくさがみ）に変貌させるため、宋代中国に成立した道教の真武神像を導入したのです。亀蛇に乗る武装した童子という妙見神の像容は、千葉氏が大きく東アジアを視野に入れて活動していた武士団であったことを物語っています。

❁ 講演2 ❁ 千葉氏と鎌倉御家人の唐物

講師：小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）

東国武士には荒々しいイメージが先行しますが、御家人の館を発掘すると、唐物と呼ばれた茶・花・香などの高級品が溢れています。武士の都鎌倉は都に負けない唐物が集まる都市でもありました。千葉氏をはじめ有力御家人は、本領とともに鎌倉や京都にも屋敷をもち、都の文化にも精通していました。一方で武家独自の儀礼や唐物志向が形成され、それは列島各地に進出した御家人たちが、鎌倉や源氏将軍とのつながりを誇示し、御家人の階層意識を表現する必須の財産となったのです。

【申込方法】

電子申請もしくは往復ハガキでお申込みください。お申込みの際にいただいた個人情報、本講座以外に使用いたしません。

◇電子申請での申込み

千葉市立郷土博物館ホームページ内の当講座のページにあるリンクから電子申請によりご応募ください。

◇往復ハガキでの申込み

往信用はがきに「講座名」「申込者氏名（フリガナ）」「郵便番号」「住所」「年齢」「電話番号」、返信用はがきに「返信用の宛名」をご記入の上、以下の問い合わせ先の住所へお送りください。

◇問い合わせ先

千葉市立郷土博物館

住所：〒260-0856 千葉市中央区亥鼻 1-6-1

電話：043-222-8231

【申込期間】

2023年11月1日（水）～11月17日（金）

※応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。

※往復ハガキでの申込は11月17日（金）

郷土博物館必着。

【アクセス】



JR総武線「西千葉」駅下車、徒歩7分

JR総武線快速利用の場合は「稲毛」駅乗り換え

京成千葉線「みどり台」駅下車、徒歩7分



【会 場】

千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館



【ロビー】





【開 会】

【進行】

司会
千葉市立郷土博物館 総括主任研究員
外山 信司



開会挨拶
千葉大学大学院人文科学研究院
准教授 学長特別補佐
久保 勇



【講演 1】

講師

天台宗宝聚寺住職、山武市、富津市等
文化財審議委員、茂原市史調査・執筆員
濱名 徳順



【講演 2】



講師

国立歴史民俗博物館名誉教授
小野 正敏



【クロストーク・質疑応答】



進行・コーディネーター
千葉大学大学院人文科学研究院教授・副学長
山田 賢



【閉 会】



閉会挨拶
千葉市立郷土博物館
館長 天野 良介

目次

開会挨拶（久保 勇）	1
趣旨説明（司会 外山 信司）	2
【講演1】千葉妙見と真武神（濱名 徳順）	3
資料	14
【講演2】千葉氏と鎌倉御家人の唐物（小野 正敏）	21
資料	35
【クロストーク・質疑応答】	52
閉会挨拶（天野 良介）	60

※本講演録は令和五年一二月九日に千葉大学けやき会館大ホールでの講座を収録した内容をまとめたものです。

開会挨拶

久保 勇（千葉大学大学院 人文科学研究院 准教授）

皆様、こんにちは。本日は令和五年度千葉市・千葉大学公開市民講座、『東アジア文化の受容と千葉氏』にご参加いただき、誠にありがとうございます。ただ今、ご紹介いただきました学長特別補佐、生涯学習及び地域連携担当の久保勇と申します。当職を仰せつかつてちょうど三年目となります。

さて、千葉市様との共催で、千葉一族を取り上げる本講座は、二〇一七年（平成二十九年）に始まりました。昨年度まででちょうど六回を迎えることになります。千葉開府九〇〇年を迎えるのが二〇二六年ですので、三年後となります。その年をゴールといたしますと、本日を含めまして、残りあと四回ということになります。



来週十二月十四日は忠臣蔵の討入の日ですけれども、二〇二六年の六月一日の開府九〇〇年、ちょうど九〇〇日前のカウントダウンセレモニーが、千葉市の市役所の庁舎一階で開催されるそうです。いよいよ九〇〇年を迎えるにあたって、その時が迫ってきたことが実感されます。

毎度のお願いとなりますが、最後に皆様のお手元にあるアンケートに、千葉氏に関わる今後の公開講座の企画テーマなど、こういうものを作ってほしいという

ご要望などございましたら、ぜひご記入いただきたいと思います。

さて、本日のテーマですが、前近代の日本はいわば「漢字」を共有した国々。「東アジア」という世界で交流を重ねてきました。「東アジア」という視点は、近代以降、大戦を挟んでも紆余曲折あった概念ですけれども、前近代、特に日本の中世という時代におきまして、当時の人々に、自分たちが東アジアにいるのだという自覚された枠組みはなかったと想像されます。したがって、本講座は現代の世界史的な視点からテーマを掲げているわけですが、千葉氏の文化活動を「東アジア」という視点から捉え直す試みというのは、一昨年も実は開催されておりました。その時は宋の貨幣、特に銅製の宋銭、それらが中世に日本に大量に持ち込まれた状況について、よく知られる新安沈船の事例などをご紹介いただきながら学んできました。そういった流れの上からも、本日のクロストークを私自身、非常に楽しみにしております。

また、中世を考えます時に、仏典とか歴史書など、「漢字」によって共有された書物文化が研究の対象になりがちですが、本日、取り上げられるイメージ、もしくはモノといったものも、もたらされています。それらは数の上でも認識の上でも、おそらく限られていたがゆえに、高い価値が見いだされたいと考えられます。本講座はこうしたイメージ、モノといったものを千葉氏が保有していた事実を、学術的方法をもって講師の先生方が解き明かしてくださると思います。こうした手法によって、中世における千葉氏の社会的地位、ステータスや政治的な権威、位置、ひいては私たちが現在住み、学んでいるこの「千葉」という地域の文化的状況を捉え直し、皆様と共有していく機会になろうかと想像しております。

若干、長くなりましたが、以上をもちまして、私の開講のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

趣旨説明

司会 外山 信司（千葉市立郷土博物館総括主任研究員）

それでは、私から、本日のテーマであります「東アジア文化の受容と千葉氏―妙見像と貿易陶磁器からみた文化と権威―」について、趣旨を説明させていただきます。

皆様は、鎌倉武士、特に坂東武士について、どのようなイメージをお持ちでしょうか。従来は、草深い関東の地に土着して開墾や所領の経営に努め、教養には乏しいが武芸の鍛錬に励み、質実剛健な暮らしを送っていたとイメージされていました。そして、千葉氏はその典型と位置付けられてきました。しかし、本当にそうだったのでしょうか？

ところで、千葉氏といえば、氏神・軍神いくさかみとして妙見を篤く信仰していたことはよく知られています。しかし、

その姿は中国の道教における真武神の図像を受容したものです。真武神は、道教では北方の神・玄武とされました。千葉氏は真武神像に基づく「妙見信仰」を浸透させることによって正当性を確立し、一族の団結を図ったのです。このような動きは、千葉氏が宋の文化を受容していたことの表れと考えられます。

一方、私どもの千葉市立郷土博物館のある猪鼻城跡からは、十二世紀に中国南部で焼かれた褐釉四耳壺が出土したのをはじめ、各地の千葉氏関係の史跡で

は、中国製の青磁・白磁といった貿易陶磁が多く出土しています。これらはステイタス・シンボル、威信財として、千葉氏の権威や権力を示すものでもありました。

本公開講座では、彫刻史、中世考古学という二つの面から、千葉氏が中国の宋の文化を受け入れ、「唐物文化からもの」を持っていたことに注目します。そして、仏像彫刻、中世考古学の第一人者である、お二人の講師のお話を拝聴し、中世の房総が「東国の都」鎌倉はもろんのこと、京都、九州、さらに中国といった東アジアとも結び付きを有していたことをとおして、千葉氏は下総の地における閉ざされた存在ではなかったこと、千葉氏が「陸と海との結節点」としての地であったことを明らかにしていければと考えております。

三年後、令和八年に迫った「千葉開府九〇〇年」に向け、千葉氏がたどった歴史について、広い視野で市民の皆様とともに考え、共有していきたいと思っています。



【講演1】

千葉妙見と真武神

濱名 徳順（天台宗宝聚寺住職、山武市、富津市等文化財審議委員、茂原市史調査・執筆員）

講師紹介

濱名 徳順（天台宗宝聚寺住職、山武市、富津市等文化財審議委員、茂原市史調査・執筆員）

千葉県出身。学習院大学文学部フランス文学科卒業、武蔵大学大学院フランス語フランス文化学科修士課程修了

専門は仏教美術。房総における仏像彫刻の第一人者。フランス、グランパレ国立ギャラリーでの『パリはにわ展』、千葉市美術館の企画展『仏像半島』の実行委員長、いすみ市郷土資料館の二つの企画展、『法興寺の仏像』『行元寺のすべて』の企画、監修のほか、千葉市サミットなど歴史・文化イベントでパネラーやコーディネーターとして活躍している。

著書は、『バイリンガル僧侶のパリ日記』（千葉日報社一九九八）、『北総の名刹巡礼』（千葉日報 二〇〇七）、『山武市の仏像』（山武仏教文化研究会、二〇一一）がある。『千葉県の歴史通史編 中世』では、中世房総の仏像彫刻の項目を担当した。

ご紹介いただきました濱名でございます。それでは、時間も一時間という短い時間でございますので、早速、話のほうを、始めさせていただきますと思います。どうぞ皆様、画面をご覧になられてリラックスしてお聞きいただければと思います。それでは、始めさせていただきます。

・奈良平安時代までの「運命神」としての妙見信仰

先程の外山先生のお話にもございましたが、千葉一族を特徴付けるものとして、妙見信仰があるわけですが、これはいわば、われわれのふるさとの千葉のアイデンティティーのようなものにも現在なっているわけです、千葉神社様がその代表といえます。しかし、そこにも東アジア、具体的にいいますと中国との文化的な交流の痕跡というのを見いだすことができますという、本日はそういうお話をさせていただきますこうと思います。

皆様、ご存じのように、日本の妙見信仰というのは長い歴史を持っています、千葉氏以前から日本には妙見信仰というのはございまして、もう既に奈良時代には相応に普及をしていたというようなことが知られております。それを千葉氏が鎌倉時代に大きく変えて、自分たちの守護神としていったわけですが、その際、中国から新しい図像であるとか、あるいは信仰、思想、そういったようなものを導入して、新たな妙見像ともいべきものを生み出していると。その辺を見ていくのが本日のお話でございます。

最初に、妙見信仰の典拠となる経典でございます。これは『妙見菩薩神呪経』という経典でございます、こちらがほぼ妙見信仰の経典の典拠となる、ほとんど唯一の典拠といえますか、こちらが元になって妙見信仰というのは展開をしているわけです。これを最初に押さえておきた



いと思いますが、これ全部読んでみると、時間があつという間に終わってしまいますので、今日の話に主要な部分を抜き出して、最初にちよつと見てみたいと思います【資料2】。

まず、「我北辰菩薩名曰妙見」とあります。私の本職は僧侶ですので、お経はすぐに読むことができます。これを読み下しますと、「我は北辰菩薩なり。」となります。

北辰というのは北極星というふうに考えてよろしいと思うのですが、「名は妙見という。」ということになります。

この意味は「天の中心にあつて、天空を支配する者である」という意味になります。北極星は自分を中心にして、その周りを星が巡りますので、天の中心にあつて自分は宇宙を支配してるのだと、こういうことがまず書かれています。

次に、「為大国師領四天下、一切国事我悉當之」という所ですが「大国師となつて四天下を領し、一切の国事、ことごとくこれに当たる」というふうに書いてございまして、これは「天をコントロールしてるだけじゃなくて、地上のことも全て自分が掌握をしている」のだと、こういうことをいつているというふうに考えてよろしいと思います。

そして、「若諸人王不以正法、我能退之徴召賢能代其王位」という所でございまして、これは、「もし諸の人王が正法をもつてせざれば、我はこれを退け、賢能のものを徴召し、その王位を代える」という意味です。

妙見は星の神ですから、天上から何でも見えています。そして、世の人々、例えば、王様の場合は王様を見ていて、それがろくでもないことやっていたら、そいつを退けて、新しい優秀な人間を王位に就けるのだと、そういうことを私はやっている。王様ではない一般の人間だったらどうするかということになると、ろくなをことやってなかったらその人の寿命を短くするという話になってしまいます。要するに、運勢を司っているということもここです。領主の場合は、王様と同じ意味合いになります。領主がろくなことやってなかったら、その人間を俺は代えるんだよと。逆にいうと、妙見が認めた領主というのは非常に優秀で優れた人間だからこそ、妙見が領主として認めているのだと、こういう話にもなるわけですね。

次に、「若能慙愧改惡修善」と、「時當率諸大天王、除死定生滅罪增福益算延寿」と書いてあります。「もし選ばれた人間がよく慙愧し、悪を改め善を修せば、我は時にまさに諸の大天王を率いて死を除き、生を定め、罪を滅し、福を増やし、算を増やし、寿を延ばす」とあります。算というのは寿命という意味です。その人の持っている寿命を延ばしてやるというようなことが書いてあります。自分を正す、仏教では悔過（けか）という法要がありますが、仏の前でよく反省して、自分のやっていることを正すと王でも一般の人間でも、そのような善人の運命を好転させるのが妙見の功德であるということです。

さらにこういったご利益も記されています。「風雨順時穀米豊熟疫氣消除無諸強敵」とありまして、「王様がそのように身を処しているとその国では、風雨は時に順じ、大雨なんか降らない。ゲリラ豪雨なんか来ないということです。穀米は豊かに熟し、猛暑で米の等級が下がってしまふなんてことはない。疫氣は消除し」と。コロナなんかすぐなくなると。「諸々の強敵無し」とあります。恐ろしい敵に襲われたりするというようなことはないと言えます。

要するに、妙見は天空をコントロールし、悪事をなくす。そういうった、

よく拝めば、あるいは妙見に対して恥ずかしくないような行いをすれば、このようなことをわれわれにしてくださいのが妙見なんだというようなことが、この『妙見菩薩神呪経』という経典に書かれています。皆様がこの経典を読めば分かるように、要するに妙見というのは天から、妙見というぐらいですからよく見えるのです、人のやつていることが。これをよく見て、そして、悪いことをしていたらその人間を叱り、そして良いことをしていたらその人間の運命を良くするという、運命神としての妙見様というのがここに描かれているというふうに考えていただけるとよろしいのではないかと思います。

そこで、そういった『妙見菩薩神呪経』という経典を基にしながら、日本でどのような妙見信仰が展開をしたのかということの説明に移ります。これは平安末に編さんをされた『十巻抄』あるいは『図像抄』というふうにいわれている図像集なのですが、平安末の段階で妙見像として三タイプの像が挙げられています【資料3】。

実はもつと他にも妙見像はあるのですが、取りあえず、この三つのタイプを挙げますよというようなことです。この三タイプそれぞれを見ていきますと、例えば、①については通常の菩薩、妙見菩薩というふうにいわれていますので、通常の観音菩薩とか弥勒菩薩と同じ姿ですが、北極星の化身である、あるいは北極星そのものであるということを表すために手に北斗七星を持っているのです。実は妙見というのは北極星であるという説と、それから北斗七星であるという説と両方あるわけですが、これについてはどちらとも決め難いわけです。いずれにせよ北辰星の化身としての菩薩だということ、雲の上に乗っかっているということは天に在るという、そういうようなことで、こういった姿のお像が一つあるわけになります。

それから次に②、竜の上に立って日月と筆と巻物を持って片足立ちするこういった妙見像が一つ描かれています。従者も片方は硯を持って、もう片方は紙を持っている。こういった妙見様の像があります。竜の上に

乗っかっているのは天空を疾走していることを意味しています。ビューンとすごい勢いで天から地上のほうまで見に来て、人間界の様子を見て善行の者、悪行の者を記録しているのです。手に筆と巻物持っているというのは、こっちは人は悪さやっているなと、こっちはキックバック受けているぞとか、要は、地上の人たちの行いを見に来て記録するという、そういった姿がここに表されています。妙見はまさに地上を巡視し人の行いを判断していく存在であり、それによって人の運命を変える存在です。人間はたくさんいるので、こっちで見たことを紙に書いておかないと忘れてしまうので、チェックするために紙と筆を持っている、そういうことではないかと思っています。

そしてもう一体、③のタイプがあります。これは②に近いのですが、お顔が怖い、憤怒相で、日月の代わりに武器を持っている。日月、持っているというものは、天空をコントロールしていることを表しているのだらうと思いますが、こちらは武器を持っている。これは悪行の者への懲罰を強調しているのではないかと私は思います。チェックして、そして、なんか悪さをやっているやつがいたら、この棒でひっぱたきますよというようにことを表すため、手に武器を持ち恐怖を具現化している。だから恐ろしい顔をしているというように感じます。これはまた別の信仰で庚申の信仰というものがあるのですが、この庚申の信仰と習合しているところが見て取ることができるようなものです。この三つが『図像抄』には挙げられています。

これを見ても分かるように、奈良時代から平安時代までの妙見像に対する信仰というのは、運命神に対する信仰である。星だから、上から人のやつていることをよく見ている。隠れられない、上から見られているから。そしてそれをちゃんと記録して、人の運命についてののを定めているのだという。ある意味では怖いそういった存在である。だから、よく崇めなければいけないよというような、強面的な側面が非常に強かったのではないかなというふうに思います。



それから、これは『図像抄』には出てなくて、『別尊雜記』という『図像抄』よりももう少し後に編さんされた図像集に出てくる妙見像としては、こういったタイプのものがございます【資料4】。④は、先程の②のお像に非常によく似ているのですが、違う所は周りに星座を従えていることです。諸星を従えて、その中で舞踏、さっきの妙見様は走っているのだと思うのですが、こちらはむしろ天の中心にあつて、諸星を従えて中央で舞踏しているという、そういった姿として描かれているものです。これは三井寺を中心に、尊敬する星の王と書いて「尊星王」^{そんじょうおう} っていうのですが、尊星王という名前で信仰された三井寺系の妙見像でして、筆や巻物は持たず、諸星の中で舞踏して、これはすなわち天空をコントロールし、四季の天候を安定させるという意味を表しています。

実は、日本の為政者にとって、この国は米作りの国ですので、天空をコントロールして、五穀を豊熟させるということが神に期待される非常に重要な役割でして、日本の祭祀というのは多くそういうことを行っているわけですが。したがって、妙見のそういった天空をコントロールしてくれるという、そういう側面にスポットを当てて、そちらの面から展開をしていくと、妙見の像はこういう姿になる。一方で、人間の行いを見て運命を定めるということになると、妙見像が先程の②のような手に巻物と筆を持つというような形にな

っていくというような流れなのかなと思います。

そしてもう一つ、吉祥天によく似たパターンもあります。実はこの⑤は妙見像ではなくて普通の吉祥天像なのですが、なかなか図像だとかが挙げられていませんので、たまたま小松寺様の平安時代作の吉祥天像を挙げさせていただきましたけども。吉祥天に似たタイプの妙見像があるということが書かれていて、皇室などはそのタイプの妙見様を信仰しているというようなことが、記録の中に出てきます。これはどういう意味かというと、天空の主で豊かな実りを与えることになります。吉祥天っていうのはまさに豊穰の女神でして、豊かな実りを与えてくださるのが吉祥天です。そういうことで吉祥天に似た妙見像というのもイメージをされていると思われます。

またもう一つは、日本人の天候神に対するイメージでいうと、天照大御神という女神が思い当たる。このような日本人の古くからの信仰のよいうなものがありますので、女性の神、女性が地に恵みを与えるのだというようなこととなります。仏教の中で女性の神様は珍しいので、吉祥天を選んで妙見のイメージにしたというようにあるのかなというふうに思います。彫像ではこういったタイプの、三井寺には、これはちょっと時代が下ったものですが、こういった妙見像なども伝わっています。ここで一つまとめますと、古代の妙見というのは運命神であるということですが。一つは「星に願いを」ということで、妙見様にお願いをして、よく信仰して良い運命を頂戴しよう、そういった信仰が平安時代の妙見様には向けられていた。あともう一つは、「星は何でも知っている」ということです。空から、妙見っていうぐらいでよく見えるっていうことです。地上からだといろいろ障害物があって見えなかったりするところもあるわけですけど、上からだとか全部見えますので、今でいうとGoogleの地図みたいなものですね、航空写真みたい。上から見ると、どこにどんな車が止まっているなんてすべて分かっちゃうのです。そういうようなことで、人の行いは空から妙見様に全て見られている

と考えられていました。罰が当たると怖いので悪いことはしないようにしよう。妙見様に、多少悪いことをしてしまっただけでも、私は妙見様を信仰していますのでよろしく願いますというようなことをお祈りする、あるいは、妙見様が見ているから、あんまり悪いことはしないようにしようじゃないかというような、そういった信仰を妙見に対して持っているというような流れではないかというふうに思います。

妙見様が運命神であるというようにことを証拠だてる一つの資料として、『寛禪鈔』という密教の百科全書があります【資料5】。そこに尊星王の項がございまして、そこを見てみますとこういったことが書かれています。「輔星属星見えざれば死すること。『妙見神呪経』にいう。」とあります。「北斗輔星は妙見の輔相なり。もし輔星、既に見えざれば、その人まさに死す。もし属星、既に見えざれば、また死す。病者もまたしかり。もし行軍せんと欲して、輔星、見えざれば、及び属星、見えざれば、勝たず。進んで賊に対すべからず。大悪期は五日云々」というようなことが書かれています。要するに「北斗星、妙見様の北斗を見て、そしてある星が見えなかったらその人は死んじゃうとか、見えたら大丈夫だとか、見えなかったら戦いやめたほうがいい」というようなことが書いてありまして、まさに運命神としての信仰であったということが、これで分かっていただけるし、他にもありますけど時間が無いから省略させていただきます。

さらにもう一つ、『入唐求法巡礼行記』、これは慈覚大師円仁が中国に渡った時のことを記した日記でございしますが、その中にこういった文章が書かれております。すなわち「以後、漂流の間、風強く涛猛し、船まさに沈まんとするを恐れ、碇を捨て物をなげうち、口に観音、妙見を称す。」です。天空をコントロールして、運命をコントロールしてくれるのが妙見様だということ、彼が中国に渡る時に船が沈みそうになっちゃったと。大変だという時に、みんなどうしたのかというと、観音さんと妙見さんをお願いをした。ここには既に観音信仰と妙見信仰

の習合のようなものが見られるわけですが、妙見はまさに天空をコントロールして、人の運命をコントロールする。そういう存在として強く信仰されていたというようなことが、こういったところからうかがえるのではないのかなと思います。

他にも、別のタイプの信仰もございします。妙見という名を「よく見える」という意味にとらえて、なくなった物が見つかるとか、そういったような信仰、あるいは目の病気になることによって、老眼になって、妙見様をお願いしたら、目、見えるようになったとか、そういった信仰もあります。平安時代の妙見様の信仰というのは運命神としての信仰であったということが、これで分かっていただけるのではないかというふうに思います。時間がなくなってしまうので、先に進めます。

・千葉妙見の成立

これまでは平安時代までの話でしたが、中世になりますと、千葉妙見というものが登場して、それまでの妙見像とは姿も大きく変わりますし、それから信仰も大きく変わります【資料6】。すいません、私の説明と皆様の資料と順番が多少違ったり、言葉が違ったりしているところがあります。これは資料をいついつまでにだしていいということで、毎日、矢のようない催促があったためです。ちょうど僕、そのころ、調査がいろんな所であって忙しくて、ゆっくりやっていく暇がなかったので取りあえず出して、後で少し直そうなとか思って早く出しちゃった。毎日、矢のように催促があったのです、誰とは言いませんが。それでちょっと早めに出してしまったので、整っていない所もあります。申し訳ありません。

話を戻します。中世になって、新たな千葉妙見というのが登場しますが、その妙見像というのがこちらであり、あるいはこちらであるというところでございます。どんなことで登場してくるのかということですが、『千葉妙見大縁起絵巻』、これは現在の千葉神社様の、いつてみれば縁起



絵巻ですが、それをちょっと読んでみますと、「我は桓武天王三代の御孫、陸奥守良文より八代、千葉常胤の孫、胤政の嫡子小太郎成胤、生年は十七歳、きょうの大將親政に見参せん。」とあります【資料6】。この人物は千田親政です。これはどこの場面だか、皆様もう千葉の方ならばよくご存じだと思います。頼朝の旗揚げの時に、平家の方人^{かとう}だった千田判官代親政が千田荘、今でいう多古の辺りから攻めてきました。その時それを迎え撃ったのは常胤の孫の成胤でした。ところが、多勢に無勢で成胤が負けそうになってしまします。どんな状況になったのかというと、「矢種尽きければ、七騎の上に」という状況でした。「矢種も尽きてしまった。もう駄目だという時に、味方も七騎になってしまった」ということです。続いて「七騎の上に傘ほどの黒雲覆い、ビンヅラ結ける童子下りて、矢を拾い、成胤の前に打ち立って射させける」とあります。戦場で加勢してくれる神様として、ここで妙見が登場してくる。そうすると、「七騎のときの声は千万騎の声に聞こえ、親政が大勢はしばらくも答えず落ち行く」ということで、妙見が加勢をしたことによって、千葉氏は戦に勝つことができたとあります。軍神に変貌した妙見が登場してきたとされています。

先程まで見ていただいたように、平安時代までの妙見様には軍神という側面はないのです。敵はなくなるとかいうようなこ

とは書いてはあるので、決してつながりがないわけじゃないのですが、平安時代までの妙見様には、決して戦場に降りてきて千葉氏に味方するというような役割や信仰というのはいないわけなのです。これを千葉氏が新たに生み出していったと、そういうようなことから考えていくことができると思います。

ちなみに、栄福寺様には『妙見大縁起絵巻』と、妙見様のお像が伝わっています。お像には体内銘がありまして、はっきり臼井城の妙見堂のお像として造像されていると書かれています。造像された年も天正四年（一五七六）であることも確認されていますし、千葉一族の原胤栄^{たねよし}という人が願主となって造像させたというようにまで分かっている。

こちら、少し時代が下ったものですが、古い妙見像を次に見ていただきますと、こちらになります【資料7】。一体一体ゆくり見ていく暇はないのですが、こちらが東庄にある、今回のポスターにもなっています妙見像です。それから、こちらは多古の妙光寺様に現在は安置をされている妙見像、こちらとこちらがおそらく妙見像としては一番古い時期のものではないか。十三世紀後半まで遡るものだろうと私は考えております。

それから、年号があるものとしてはこちらもありまして、銚子の堀之内神社の妙見像には、建武二年、一三三五年の年号が亀のお腹の所に書いてある。それから、山武市の個人蔵の妙見様の懸仏^{かけほとけ}ですね。こちらには正安元年、一二九九年ですね、十三世紀ぎりぎりのお像。こちらとこちらは坐像で、非常によく似た図像であることが分かっていただけるだろうと思います。ちなみにこちらは、成東城の成東千葉氏に伝わったお像と考えることができます。それから佐賀県小城市の岩蔵寺様のお像、今、このお像は火事で壊れてしまったのですが、こういう銅鑄造のお像もある。こちらが十三世紀代のものではないかと私は思います。

それからもう一体、これはつい最近、確認をされたお像ですが、袖ヶ浦市の光福寺様のお像でして、あそこは上総ですが、西上総には特に畔^あ

蒜^{びる}郡^{びる}辺りに鎌倉時代後期に千葉氏化した上総氏がいました。この意味が分かりますか？ 上総氏がどういうふうにして千葉氏化するのかというと、おそらく千葉氏と血縁を結びながら、名前をまず「胤」に変えるのです。何とか胤、信胤とか佐胤などのようにです。そして、妙見様をお祀りします。そして、千葉氏に姿を変える。そういった人たちが妙見信仰を展開したのが、畔蒜郡辺りというふうにいえるわけですが、そのまさに中心地ともいえる袖ヶ浦にこういった古い時期の、十四世紀の妙見像が残っていたというようなことでございます。

このように鎌倉時代に入ると、それまで皆様、今まで見ていただいた日月持ったり、片足立ちしたり、吉祥天の姿をしたりというような妙見とは全く違った妙見像が現れて、それもほとんどが千葉県内で千葉氏が関係をした所に伝わったお像であるというふうにして考えていくと、こういったお像は他ならぬ千葉氏が鎌倉時代の後期、十三世紀後半に妙見信仰をリニューアルして、そして新たにこういった姿のお像を造り、妙見信仰を展開したということがいえるのではないかと思えるわけです。

そして実は、どんどん先に行かないと時間がないので、話を進めていきます。こちらのお像に關していうと、ルーツが中国にあると考えられます。日本の平安時代の妙見像とかではなく、全然違ったルーツを持っています。中国にそっくりな、だが全く同じではなく、多少、換骨奪胎して導入されたわけなんです。そういったお像が中国にあるというようなことが確認をされておりまして、これは特に東京国立文化財研究所にいらした津田徹英先生などがこういったところを紹介してくださったわけなのですけれども、いかがでしょうか【資料8】。

例えばこちらのお像、中国の道教の真武神というタイプのお像で、これは少し時代が下った明代のものです。実はあまり古い時期のものはあんまり中国に残っておりません。というのは、道教の真武神信仰の本山であるような所が、ある時期に大火災で焼けてしまっていて、古いお像っていうのはその時になくなってしまう、それ以降に復興されたお像が

多いというようなことで、なかなか古いお像、適当なお像があまり見つかってない。これから見つかることは十分あり得るでしょうが、あまり古いお像はないのですが、例えばこちらのお像などをご覧になっていただと、千葉妙見のお像の像容そのものでございます。玄武の上に乗って武装した神が、それも髪の毛、長くして、被髪^{ひはみ}っていうのですが、そういう姿が、まさに千葉妙見の姿そのものであると。

他にも、古いものとすると、例えば、これは重慶にある大足石窟^{だそく}で読むのでしょうか。これはそこにある十一世紀代、宋代まで遡ると考えられているお像です。やはり亀の上に乗った、武装した、剣を持ったお像、顔はおやじさんみたいなものが描かれているし、こういった他の所からもぼつぽつと古い時代まで遡るものが見つかっているし、その古いものを復元したとされる、焼けて再興したと思われるお像も、こういった所で見つかっていて、千葉氏はこれを導入したんだろうと考えられます。では、千葉氏はどのようにしてそういった道教の真武神像というものを、中国から輸入することができたのかということ、これがまた疑問となってくるわけです。

時間もないので次に進ませていただくと、道教の、実は関係の文献に『雲麓漫抄』というものがあるわけでございます【資料9】。そこにはこのようなことが書かれていまして、「朱雀、玄武、青龍、白虎は四方神なり」とあります。また、「祥符間」、祥符間というのは一〇〇八年から一〇一七年、この間ということだそうです。「聖祖の諱^{いみな}を避け、始めて玄武を改め真武となす」とあります。皇帝の先祖の名前の一字とこの神の名前の一字が玄と同じなため、玄を替えて真にしたと。そしてその時「その像を描いて北方の神となす。被髪、黒衣、剣を杖突き、亀蛇を踏む。従者は黒旗を執る。自後奉祀す。」というようなことが書かれていまして、十一世紀にこういった姿が真武神という形で新たに道教で作られて、信仰をされるようになっていったと分かります。

それまでは北方の神、玄武というと、亀と蛇が絡みついたものという



ことで、朱雀だとか青龍だとかつていうのと同じように、人格神ということではないのです。北方なら北方の自然の力、東方なら東方の自然の性格、そういうようなものを亀と蛇が絡んだもので表したり、龍で表したりしていたということです。ところが、この時期に道教の中で、これを人格神として表して、守護神としようというような流れがあつて、この真武神つていうものが生まれたのだということになります。そして、この被髪というのは髪を長くということですから、ちょんまげを結っているのではなくて、長い髪をそのまま総撫でにしているという、開いた髪ということ、この髪型、妙見様もまさにこの髪型なのですが、この髪型がこの時に真武神の姿として定められたといいますが、そのような姿としてイメージをされるようになったとされます。黒い服を着ていると、又は赤黒い服を着ているということだそうです。それから剣を杖突き、つまり剣を持っている。それを、杖突くというのとは下に向けるつてことですかね。これは大地を鎮めるというような意味合いがあるのだろうというふうに思います。そして、亀蛇を踏むというのは、亀蛇というのはまさに玄武でして、元は玄武なのだと、北方の神様なのだというようなことを明確化するために亀蛇を踏むというふうになっている。

この真武神というのは人間に降り、すなわち被髪跣足、跣足つていうのは裸足という意味で

すね。「剣を伏し、もつて妖邪を云々」というふうに書かれていまして、要は、地上が乱れていたりする時に、守護神として王を助けて、そしてそこにみなぎっている妖気を払ってくれるというような、ある種、戦闘的な守護神としての性格をこの真武神というのは帯びています。だから日本が当初、輸入をした妙見信仰というのはちょっと違った、しかし北方の神様という点では一致をしている真武神つていう神格が、道教でも十一世紀ぐらいに生まれて、それは運命神とかということではなくて、あるいはそういう性格もあつたかもしれないんですが、どちらかというとやや戦闘的な守護神、そういった役割を持っている。だから姿も、ちょっと戦闘的な姿を取っていたということがいえるのではないかとこのように思います。

そして、もともと妙見という神と、玄武あるいは真武神というのは別物ですが、北方の神に対する信仰ということでは習合する部分もあるわけ、千葉氏はこれに出会った時に、これは面白いものがいたなど。単なる運命神じゃない。これを導入すれば、我々の軍神として、守護神として信仰することができるじゃないか。これをもって、自分たちのシンボルとして一族の信仰をそこでまとめていくことができると、千葉氏という一族の紐帯といいますか、結束するツールとすることができるとはならないかと思われれます。

戦をする時は、中世武士団、結束するつていうことはすごく大事ですよ。戦っている時に、一人一人が全然別のことを考えてしまうということでは、ちゃんとした戦いにはなりません。ロシアみたいにワグネルがいきなり軍の上層部の批判をしているというようなことになる、戦に不可欠な統率が保てなくなつて、勝てなくなつてしまふ。ガタガタと崩壊していくつていうことになってしまいますので、自分たちをまとめる信仰のようものがどうしても大切になってくるわけです。

千葉氏としては単に運命を定めてくれる存在では、それは軍神にならないし、戦の時の一族の紐帯にもなり得ません。その時この真武神を見



つけた。これを導入すれば、自分たちのシンボリック的存在とすることができないのではないかと、とうとうふうに考えたのではないかと思われる。しかも、そこにはこういった玄武は武曲星の顕現の験といったようなことがございまして、中国でも、武曲星というのは、北斗七星のうちの一つの星なのですが、北斗星と玄武、あるいは真武神というのが同体であるというような考えが、同じく北方の神ですから、これが両方とも同じものだというような考え方が既にありますし、そして日本にも、「尊星王、七星中の第六星なり」という考えがあります。これも妙見は北斗七星のうちの第六星である武曲星であるといったような考えが、もう既に平安時代からしてあるわけです。真武神を導入する前からして、日本にもある。

中国にも、玄武と北斗、北辰っていうのは一緒だというような考え方もあったわけですが、千葉氏でも、うまくこの両方を接合することができないのではないかと考えたのだと思います。特に北斗の中の武曲星ですが、こちらが武曲星の画像化したものです【資料9】。こちらを見ていただくと、武曲星には名前からしてやや戦闘的な意味合いがあつて、イメージとしては守護神として十分活用し得るような姿をそもそも取っていた。しかも、真武神とは同体であるというような考え方も、中国でもあるし、日本でも妙見とこの武曲星は一体のものであるというような考

え方もある。これは面白いアイテムを見つけたぞというのが、千葉氏の考えだったのではないかと、うとうふうに思います。

時間がなくなってきましたので、急いで話を進めていきます。千葉氏の時代、鎌倉時代、千葉氏以外にも妙見信仰、尊星王信仰というのはございます【資料10】。『吾妻鏡』を読んでもみますと、貞応二年（一二二二）、安貞元年（一二二七）、貞永元年（一二三二）など、こういったいろいろな年に、尊星王法が行われた。あるいは、尊星王護摩が厳修されたというようなことが、記録をされています。したがって、千葉氏以外にも妙見信仰というのは鎌倉時代にもちらんあつたわけです。それはどのようなものであつたのかということを見ていくと、貞応二年九月十日の条に、「己酉、天変のご祈禱等を始めらる」とあります。いわゆる、愛染王護摩、薬師護摩、尊星王護摩、北斗護摩、七曜供などというふうにあります。鎌倉幕府、これは鶴岡八幡宮寺でこういった祭祀が行われたわけですが、一体、何のためにやったのかというと、天変があつた時なのです。

・千葉妙見成立と千葉寺僧了行

要するに、鎌倉幕府の妙見信仰というのは、平安時代の妙見信仰から全然リニューアルされてない。旧態依然たる妙見信仰を鎌倉幕府はこの後もずっと行っています。幕府を通じて千葉氏は新しい妙見信仰、妙見像を獲得したのではない。自分たちが独自のルートで妙見信仰を獲得したというふうに見えるし、か。

そして、そこで気になってくるのは、これは『宋版一切経』という經典の中に、「下州千葉寺比丘了行捨」との文言があります。これは東寺に伝わった『宋版一切経』です。『宋版一切経』は五〇〇〇巻以上ありますが、これをひとまとめで買って来るといふのは大変高価なため、そんなたくさん鎌倉時代の日本に輸入されたものではありませんが、そのうちのひとつが東寺にあります。この東寺の五〇〇〇巻あまりの一切経



を全て細かくチェックするという研究をしている人がいるわけです。そうするとそこに、經典の内容だけではなくて、これは誰がお金を出してくれて、この版木を作ったのだということも分かります。これを「施財賦」とか「捨財賦」というふうにいたりするのですが、それが書かれてあるものが結構ある。多くの場合、中国人がいろんなことをお願いして、例えば子ども生まれないで、子ども生まれてほしいとかっていうことをお願いしたりとか、先祖の供養をお願いしたりとかっていうようなことでお金を出して、その版を開版するのです。

『宋版一切経』の開版の事業っていうのは、最初はほぼ国家的な事業として行われていますから、人からお金集めてやつたりはしてないわけですが、版木ですから刷っているとそのうち悪くなっちゃうわけですね。何十年か経つと新しく起こさなければいけなくなつて、また別の所で開版が行われるわけです。今回はお寺などが中心となつて、『宋版一切経』の開版を行うわけです。大変お金がかかることですから、その際は民間からたくさんのお金を頂戴して、開版する。お金をもらったからには何かで返さなければいけないのです。そのため、「あなたの名前を、お経の中に残します。誰々が両親の供養のためにお金出しました。」などということが書いてある。これを捨財賦、施財賦といいます。

その中に日本人の名前が何人

か出てきます。東寺版の『宋版一切経』ですと、四人の日本人の名前が出てきて、そのうちの一人が千葉寺了行です【資料10】。千葉の坊さんが『宋版一切経』の開版に際してお金を出して、その事業を助けている。他にどんなお坊さんが東寺版には出てくるのかというと、西山法華寺、あるいは法華山寺という所のお坊さんが出てきて、西山法華寺、現在はないのですが、これは京都にあつて、撰闋家の九条家と非常に関係の深いお寺です。いつてみれば撰闋家の氏寺に近いようなお寺であつた人たちと、どうも了行と一緒に中国に渡つて、こういった『宋版一切経』の開版に関わつたんじゃないかと思われまふ。

その時期も分かっています。滋賀の金剛輪寺様にございます聖教の【資料11】。『観音玄義科』がありまして、その奥書にこういった識語がございます【資料11】。「嘉禎三年」、この年は一二三七年ですが、「丁酉七月二日、東洛楊梅大宮一条弘通法家十一面觀世音菩薩御宿房において書了んぬと。この科、前代未度なり。」これ以前、この本は日本には渡つてきていないと。「了行上人渡唐をなすの時、この科本を求得、帰朝の次将来。時に嘉禎二年丙申の夏。」このように書かれています。嘉禎二年という年、一二三六年に間違いなく了行という人は中国に渡つていて、『宋版一切経』の開版にも、九条家の坊さんたちと一緒に関わったことが明らかにあります。

これは、我々の海外旅行と違うのです。我々だとパリ行ったら、ルーブル行つて、おいしいフランス料理食べて、帰りにはディオールとか行って洋服買つて、お土産買つて帰ってくる。それだけです。相当の長い期間、その当時、中国に渡るに関してはいろいろ研究もございしますが、下手すると今でいえば億近い費用が必要になる。いろいろ物、買つてきたりするつていうこともあるので、誰でも彼でも行けるわけではない。その点、九条家がバックにいたりとか、千葉家がバックにいたりすれば、そのぐらいのお金は工面できないわけではない。しかも、ある程度の目的をもって、こういった人たちというのは中国に渡つたのではないか



というふうに考えることができるわけですが。

もちろん、了行が真武神の画像を、真武神信仰のそういった經典を見つけて持ってきたかどうかは分かりません。しかし、この人も十分そういったことをする可能性があるのじゃないかと思えます。少し時期的に早過ぎるかもしれませんが、千葉妙見真武神のようなお像がスタートするのは、十三世紀後半だと思えますので、いくら早くても十三世紀中ごろぐらいに将来されたのではないかというふうには、私は思うんですけども。そのようなことがあります。

この了行という人物はなかなかの曲者だったようでして、幕府転覆をその後企てて捕まってしまいます。十四年後の建長三年、一二五一年十二月には九条家と結んで、幕府転覆を試みて捕まり、誅せられたというふうなことが『吾妻鏡』の建長三年の所に書いてある。というようなこととでございまして、なかなかのやり手だっただけに、そんなようなことも起こしたのではないかとこのように思います。

最後に結論を申し上げます【資料14】。千葉氏の妙見信仰が平安時代にはどうであったのかというところは話せなかったのですが、まとめだけここでさせていただきますと思います。古代から平安時代までの妙見信仰というのは運命神としてのものであった。千葉氏は中国から道教の真武神を導入して、これを軍神としてリニューアルし、一族の守護神と

した。その際、千葉寺了行など一族の僧が入宋してもたらした可能性が高いと思います。彼らは京にも拠点を持ち、常に新しい情報を得ていたということが分かります。

新たな妙見神は、古代以来の運命神、巡視者としての性格を受け継いで、支配者の側、統領に対しては正しい行いで領地、領民を守ることを勧め、家臣には統領に対して正しい行いを強いる。また、武装して正しいものを守るといった軍神的性格を加えています。

さらに、忠常などについては話せなかったのですが、祖先が持っていた七仏薬師信仰、これは北斗信仰ともつながることで、両総平氏の嫡流としての正当性を主張することができるとなるシンボルとなり、武士団の守護神としては大変教理的に整ったものだった。こうしたドグマを手に入れた、武士団の結束を維持したとすれば、千葉氏にとって東アジアとの交流は青磁など威信財を獲得するだけではない、重要な政策だったということができるとこのように自分は思います。

途中で時間がなくなってしまうので省いたりしました【資料12】・【資料13】。古代の妙見信仰と千葉氏の妙見信仰はどうつながるのかということについては、また次の機会にということで、また次にお呼びいただきます。それでは私のお話は以上で終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

千葉妙見と真武神




千葉市・千葉大学公開市民講座
「東アジア文化の受容と千葉氏」
令和5年12月9日 於 千葉大学
宝聚寺住職 浜名徳順

▼資料2 真武神像 台湾国立博物館蔵 妙見像 光福寺蔵 資料1▲

妙見菩薩神呪經

我北辰菩薩名曰妙見今欲說神呪護諸國土所作甚奇特故名曰妙見處於閼浮提衆星中最勝神仙中之仙菩薩之大將光目諸菩薩願濟諸羣生有大神呪名胡捺波自低帝居蘇吒阿若蜜吒烏都吒具香吒波賴帝吒耶彌若吒烏都吒拘羅帝吒香摩吒莎訶

誦呪五遍七色結作三結繫痛處此大神呪乃是過去四十億恒河沙諸佛所說我於過去從諸佛所得聞說此大神呪力從是以來經七百劫住閼浮提爲大國師領四天下衆星中王得自在四天下中一切國事我悉當之若諸人王不以正法任用臣下心無慙愧暴虐濁亂諸群生酷虐百姓我能退之徵召賢能代其王位若能慙愧改惡修善若能任善退諸惡人其心弘廣普慈一切眷受極濟猶如橋船包含民物猶如父母國有賢能當徵召之尊賢尊聖如親父母王自躬

④若し能く慚愧し、惡を改め、善を修せば、我は時に當に諸の大神王を率いて、死を除き、生を定め、罪を滅し、福を増やし、算を益し、壽を延す。自分を正す善人の運命を好転させる

⑤風雨は時に順じ、穀米は豊かに熟し、疫氣は消除し、諸の強敵無し。天空をコントロールし、惡事を無くす

①我は北辰（北極星）菩薩なり、名を妙見と曰う。天の中心にあつて天空を支配する者である

②大國師と爲り、四天下を領し、一切の國事、悉く之に當る。地上の事も全て自分が掌握している

③若し諸の人王が正法を以てせざれば、我は之を退け、賢能のものを徵召し、其の王位を代える。悪い行いの者（王）を見出して、これを退ける、善い行いの者を見出す。

身臨政斷事不枉民物猶如明鏡若其國王能修是德改往修來悔先所作慙愧自責鄙倖愆咎自悔責已當修三德一者恭敬三尊二者憐愍貧窮國土孤老當撫恤之三者於怨親中心常平等斷理怨枉不枉民物若能修行上來諸德我時當率諸大神王諸天帝釋伺命都尉天曹都尉除死定生滅罪會算益算延壽白諸天曹差諸善神一千七百遍衛國界守護國土除其災患滅其奸惡風雨順時穀米豐熟疫氣消除無諸強敵人民安樂稱王之德是王若能兼行證諸此陀羅尼譬如轉輪聖王得如意寶珠是珠神氣消伏災禍我今以此大神呪力上來諸德悉能辨之消災滅惡示復如是當知是此大神呪力如王明珠示復如是

妙見菩薩神呪經

『大正新脩大藏經』第21卷・密教部四、No.1332



▼資料 4

『図像抄』より 資料 3 ▲



小松寺蔵

(写真は登壇者撮影)

園城寺蔵

不見輔星屬星死事
妙見神呪經云、北斗輔星者、妙見之輔相也、若輔星已不見者、其人將死、若屬星已不見者、亦死、病者亦爾、若欲行軍、輔星不見、及屬星不見者、不勝、不可進對賊、大惡期五日云々

依北斗色流星長短知死生事
又云、欲知人死生者、常以夜半視北斗七星、屬星色、其色黃者、其人不死、青者、十死一生、黑者、萬死一生、白即生、赤者、萬生一死、王相之時、以決其死生期文

「尊星王」『覺禪鈔』

延暦十五年（七九六）三月庚戌、勅す、北辰を祭るを禁ず。朝制已に久し。而て所司侮慢し、禁止する事をせず。今京畿の吏民、春秋口月に至る毎に、職を棄て、業を忘れ、其場に相集ひ、男女混殺して、事を潔清し難し、□□□□、反て、其の殃を招かん。今より以後、殊に禁断を加ふ。若し已獲されば、人毎に、日を異へ、會集せしむこと莫れ。若し此の制に乖はば、法師は綱所に送名し、俗人は違勅罪に處す。

『類聚國史』

「絹の衣を盗ましめて、妙現菩薩に帰願しまつり、其の絹の衣を修得せし縁」上巻 第三十四

「妙見菩薩の變化して異形を示し、盗人を顯しし縁」下巻 第五

「網を用ゐて漁せし夫の、海中の難に値ひ、妙見菩薩を憑み願ひて、命を全くすることを得し縁」下巻 第三十二

『日本靈異記』薬師寺 景戒著 弘仁十三年（八二二）頃

「以後漂流の間、風強く湍猛し、船將に沈んとするを恐れ碇を捨て物を擲ち口に観音・妙見を称す（…）」

『入唐求法巡礼行記』円仁著 承和五年（八三八）

▼資料 6

資料 5 ▲

千葉妙見の登場

我は桓武天王三代の御孫、陸奥守良文より八代、千葉常胤の孫、胤政の嫡子小太郎成胤、生年は十七才、今日の大將親政に見参せん（…）矢種つきければ、七騎の上に傘程の黒雲覆い、ピンツラ結ける童子下りて、矢を拾い、成胤の前に打ち立つて射させける。（…）七騎の凱は千万騎の聲に聞こえ、親政が大勢はしばらくも答えず落ち行く。（…）

『千葉妙見大縁起絵巻』



▼資料 8

写真は登壇者撮影

(岩蔵寺像は『小城市文化財調査報告書第三集 岩蔵寺資料』1986 より転載)

資料 7 ▲



朱雀、玄武、青龍、白虎は四方神たり。祥符間（一〇〇八）一〇（一七）聖祖の諱を避け、始めて玄武を改め真武と為す。（一）後に醴泉觀を興すに龜蛇を得、道士以て真武觀を為す。其像を繪いて北方の神と為す、**披髮、黒衣、劍を仗き、龜蛇を踏む。**從者は黒旗を執る。自後奉祀す。益嚴して鎮天佑聖と加号す。『雲麓漫抄』和訳演名

降於人間、則披髮跣足、伏劍以妖邪（一）

『真武靈応大醮儀』

玄武者（一）武曲顯現之驗

『太上説玄天大聖真武本伝神呪妙経』

尊星王、七星中第六星也、見抄、或天文説

『覚禪抄』尊星王法「虚空現図」

或云、妙見者則七星中第六輔星、即妙見也

『同』妙見北斗并輔星分身」

▼資料 10

資料 9 ▲

尊星王護摩・尊星王法

貞応二・九・一〇	(26)
安貞元・四・二九	(脱)
貞永元・閏九・一〇	(28)
嘉祿元・一二・二四	(29・30)
仁治元・正・八	(33)
寛元二・正・八	(35)
六・三	(35・36)
寛元三・一〇・九	(36)
宝治元・五・九	(38)
文永三・正・一二	(52)

千葉寺了行刊記
『大般涅槃経』卷第三一
(京都東寺宋版一切経)

十日、己酉、天變の御祈禱等を始めらる、所謂、

愛染王護摩

藥師護摩

尊星王護摩

北斗護摩

七曜供

屬星祭

月曜祭

歳星祭

太白星祭

天曹地府祭

七座泰山府君祭

辨僧正定豪

大進僧都親基

内大臣僧都親慶

信濃法眼道禪

助法眼珠譽

晴賢

親職

知輔

忠業

泰貞

晴幸

右近衛

重宗

道寛

文元

信賢

重宗

『吾妻鏡』貞応二年
(一一二二)九月

東国武士（千葉氏一族）出身の僧了行と道源が、京都の権門と関係を持ちつつ經典を求めて宋・元に赴いた（…）当時のわが国の文化状況に対する従来の西高東低的な理解を相対化する必要を指摘（…）

野口実「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動」

『京都女子大学宗教・文化研究所 研究紀要第二四号』

嘉禎三年（一二三三）丁酉七月二日、於東洛楊梅大宮一条弘通法家十一面觀世音菩薩御宿房書寫了

此科前代未度也、爲了上人渡唐之時求得此科本、帰朝之次将来時于嘉禎二年丙申夏

「観音玄義科」奥書滋賀金剛輪寺蔵

結願云々・○十七日壬申、將軍家爲御方遠而、武藏守朝直第人御、從幕府「當辰未之方」云々・○廿二日丁丑、鎌倉中無故有物恣謀反之輩之由、巷説相交、幕府并相州御第警巡頗嚴密云々・○廿六日辛巳、復降於

地積之事三寸・今日未就之及一點而世上物恣也、近江大夫御官氏信、武藏左衛門尉景賴生虜了行法

師、矢作左衛門尉千葉介長次郎左衛門尉久連等、件之輩有謀叛之企云々、仍諏方兵衛入道蓮佛・美之義

推問子細、大田七郎康有而記詞、逆心悉顯露云々、其後鎌倉中弥騒動、諸人競集云々・○廿七日壬午、天晴、被誅逆叛之衆又有配流之者云々、近國御家人群參如雲、皆以可飯國之由被仰出也、

『吾妻鏡』建長三年（一二五一）十二月

一当山一切経蔵安置唐本青表紙御経事
右唐本者、千葉道源房云僧、発一切経将来之願、申綸旨渡唐、渡二部之一切経之处（…）

「唐本一切経事」『摺拾集』

入宋の沙門、道眼上人、一切経を持来して、六波羅のあたり、やけのといふ所に安置して、ことに首楞嚴経を講じて、那蘭陀寺と号す。

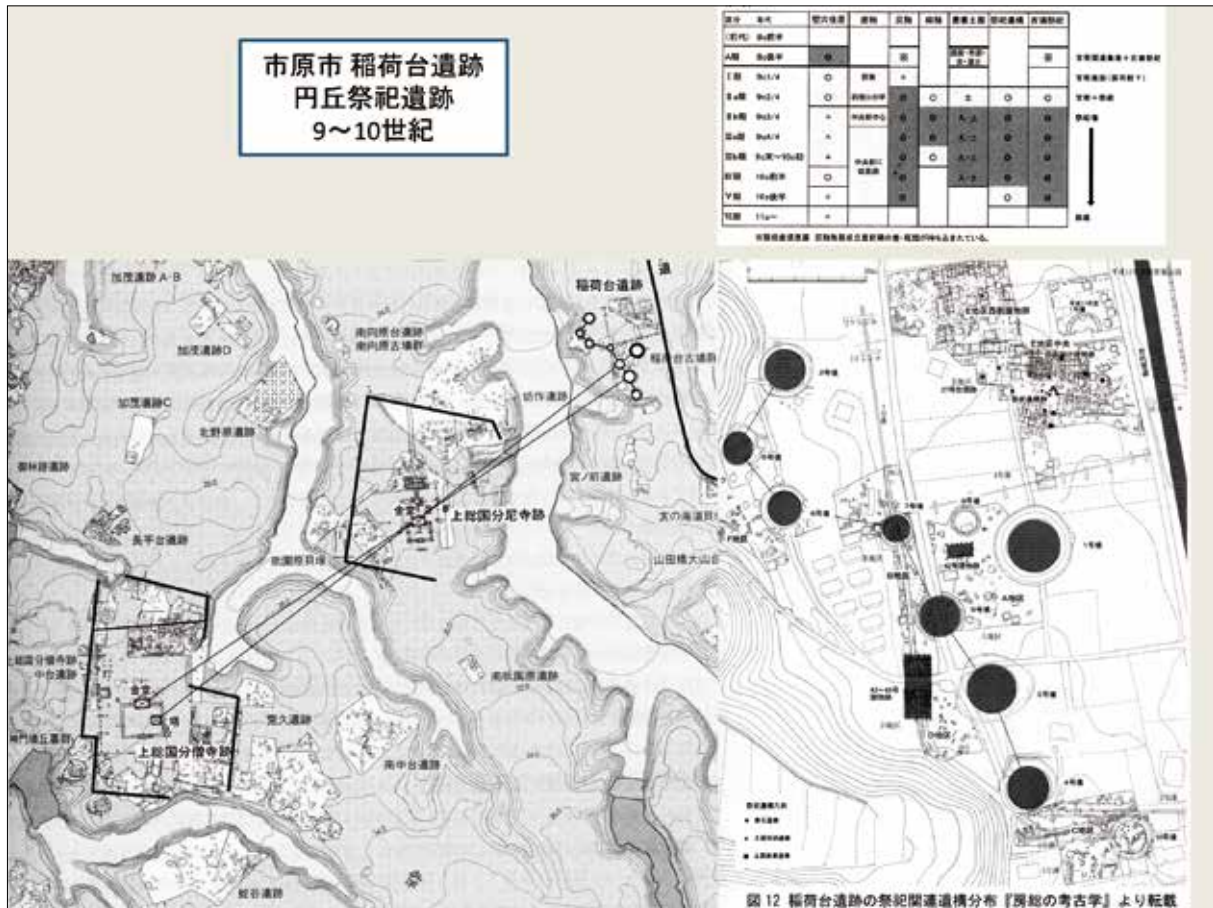
『徒然草』第七十九段

▼資料 12

資料 11 ▲



『仏像半島一房総の美しい仏たち』千葉市美術館 2013所収・千葉市教育委員会（撮影：宇佐美順一・一夫）より転載



▼資料 14

資料 13 ▲

まとめ

古代～平安の妙見信仰は運命神としてのものだった。

千葉氏は中国より道教の真武神を導入して、これを軍神としてリニューアル、一族の守護神とした。その際、千葉寺了行など一族の僧が入宋して齋した可能性が高い。彼らは京にも拠点を持ち常に新しい情報を得ていた。

新たな妙見神は、古代以来の運命神・巡視者としての性格を受継いで、支配者側（統領）には正しい行いで領地・領民を守ることを勧め、家臣には統領に対して正しい行いを強いる。又、武装して正しいものを護るという軍神的性格を加えている。

さらに、忠常など祖先の持っていた七仏薬師信仰（北斗信仰）とも繋がることで、両総平氏の嫡流としての正統性を主張することも出来るシンボルとなり、武士団の守護神としては大変教理的に整ったものだった。

こうしたドグマを手に入れて、武士団の結束を維持したとすれば、千葉氏にとって東アジアとの交流は青磁など威信財を獲得するだけではない、重要な政策だったと言える。



【講演2】

千葉氏と鎌倉御家人の唐物

講師紹介

小野正敏おの まさとし（国立歴史民俗博物館名誉教授）

神奈川県出身。明治大学文学部卒業。

専門は日本中世考古学。貿易陶磁研究の第一人者として知られる。

国立歴史民俗博物館副館長、人間文化研究機構の理事などを歴任。

現在は福井県立二乗谷朝倉氏遺跡博物館の特別館長を務める。本県との関わりでは本佐倉城跡の国指定史跡化に携わった。

歴史民俗博物館では学際的な共同研究を展開し、『陶磁器の文化史』（一九九八）、二〇〇五年の『東アジア中世海道 海商・港・沈没船』（二〇〇五）などの企画展を開催した。

著作は『戦国城下町の考古学 一乗谷からのメッセージ』（講談社、一九九七）、編著として『図解・日本の中世遺跡』（東京大学出版会、二〇〇二）、『戦国時代の考古学』（高志書院、二〇〇三）がある。

・はじめに

丁寧なご紹介、ありがとうございました。この歳になって、こういう場で自分の昔のことを語られるっていうのは、なんか変な感じがします。昔そのようなことがあったなと思いつつ、懐かしく聞いておりました。その割に同じようなことを相変わらずやっていて進歩がないという、

そんな思いも半分いたします。

本日のタイトルですが、最初、外山さんから「千葉氏と唐物」ということをお願いしたいとの依頼がまいりました。考えてみると、あまり千葉氏と唐物だけで私が一時間語れるような内容がないのです。決して千葉氏がそういう品々を持つていなかったということではなくて、私がやっております考古学からそのようなことがどれだけ語れるのかということ、その情報がほとんど無いということです。

先程濱名さんから、仏像あるいは宗教関係を軸に千葉氏との関係についてあれだけ多くの話をされたのですから、本来であればそういう話題がたくさんあるはずなのですが、悲しいことに考古学からはそこまでの話をする情報がないという、そういう意味です。そのために私は今回のタイトルは、「千葉氏と鎌倉御家人の唐物」という、ことにいたしました。

このようなタイトルにした理由ですが、一つには今いましたように、千葉氏そのものの考古学的な発掘情報がやはり少ないという、これが一点です。もう一つは、実はこのテーマで諸国の御家人と唐物という視点で見た時、千葉氏だけが特別だという言い方ができるかどうかという問題があると思います。結論的にいえば、少なくとも私がやっている考古学の世界から見れば、実はどこでも同じ、御家人クラスだったら大体似たような意味で、こういった唐物というものに対しての付き合い方が決まっているというふうに見ております。そういう意味で、どちらかというと御家人と唐物の関係を見た時に、どのようなことが語れるだろう

小野 正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）



かという、そういう視点でやってみたいと思っています。

私の話ですが、大きく四つぐらいに分けようかなと思います【資料1】。一つは武家と唐物。中世になって初めて権力の表舞台に出てきた武家です。それまではどちらかというと、朝廷だとか、そこを取り巻いていた公家という京都中心のそういう世界があったわけですが、ようやく新しい新興勢力として武家が台頭してきた時に、彼らなりにどういう思考で唐物と付き合ったのかという、こういう視点が一つあります。

次が千葉氏を含めて鎌倉についてです。鎌倉を「東国の武家の都」というようにいいますが、実際に鎌倉の唐物とはどういったものであったのか。そこにどういう論理があるのかという、そういう話を二番目にしたいと思います。

それから、先程少し話が出ていましたが、外山さんの最初の話にもありましたとおり、これまで在地の武家というのは、一所懸命、自分の本領の所に命を懸けて、そこを開発し、じつと守っていくものだという論理があったと思うのです。今はそうではなく、京都、鎌倉、そして全国のネットワークの中で彼らが生きていたのだという話になってきていると思います。そういう中で、千葉氏そのものも鎌倉にも屋敷を持っていましたし、京都にも屋敷を持っていました。それから伊賀の国の守護でもありましたので、おそらく

伊賀のほうにも屋敷を持っていたはずですが。また、そのような地域以外にも、現在の鹿児島島の東部にあたる大隅の守護でもありましたので、当然、そこにも屋敷があったはずですが、このように千葉氏は列島に広がる大きなネットワークの中で生きてきたのだということになってくると思います。特にここでは、鎌倉の千葉氏の位置付けについて、少し考えてみたいと思います。

講演の最後のところで、時間が許せば、御家人館と唐物ということで、全国の御家人の代表選手、考古学的な意味で良質な資料を持っている御家人の館の発掘例を使いながら、唐物だけではない、当然そこに鎌倉との関係の中で生きている御家人の姿というのがありますので、そういった問題についても少し触れてみたいというのが今回の構成ということになっております。

ただし、先程の濱名さんではありませんが、時間がないといって、途中からだんだん私のほうも話すスピードが速くなっていくかと思っていますので、一通り、私の描いているストーリーは皆様のお手元に資料として用意しておきました【レジユメ】。私はあのようなレジユメを書いても、そのとおりにお話しできたことがないので。途中で終わってしまうか、あるいは飛ばしてしまうということが多いので、もし、気になる方がおりましたら、後程ゆっくりと私のほうのレジユメを読んでいただけたらありがたいなと思います。

・武家と唐物

最初の話題であります。先程出ていましたように、千葉氏の本拠、鎌倉時代の本拠といえますのは千葉堀内という所です【資料2】。特にこの図に、周りの沖積地の中に縞状に色が付いているかと思いますが、この中心部、現在でいいますと千葉地方裁判所のあたりに千葉氏の館があったらしいといわれています。では、その話をということになるの

ですが、悲しいことに今、都市化されていて発掘情報も全くありませんので、そこから得られる成果が考古学的にはほとんどないのです。したがって、先程いったように、ちょっと他の事例を使いながら話をしなければいけないかなという、そういうことです。

先程外山さんがいつていたように、亥鼻台地に猪鼻城という戦国期に使われた城がありました。千葉堀内という千葉氏の本拠を見下ろす台地の一番西北の外れの所に、猪鼻城の土塁跡があります。その土塁の下から鎌倉期の蔵骨器、火葬骨を入れた骨壺が出土しました。それがこの三点ということになります。一番右側が中国製の茶色い釉薬(うわぐすり)かけた壺。真ん中が常滑の壺、東海で焼かれた壺です。一番左側が瀬戸で焼かれました灰釉(かひゆう)、木の灰をかけて焼いた四耳壺、耳が四つ付いている、そのような壺ということになります。

これは大変面白い資料でして、鎌倉期のおそらく半ばから後半ぐらいのものだと思うのですが、三ランクの陶磁器が揃っています。もともとこれは蔵骨器として用意されたものではなくて、日常使っていた器が骨を入れて埋める、二次的にそういう道具に使われたと考えられます。当然ながらここで一番ランクが高いのが、中国製の陶磁器。次がそれをコピーした瀬戸のこの焼き物。そして一番ランクが下がるのが、この常滑の焼き物という、こういうふうにより三つのランクの陶磁器をここで見ることでできるということになります。

そういうつもりで埋めたのではないと思うのですが、私たちはこういう焼き物の使われ方を見ると、どうしてもその権力のランクといったようなものを見ようとしてしまいます。ただし、気を付けなければいけないのは、ここで見るこの三ランクそのものが、俗界におけるそれぞれの権力の絶対的な強さをそのまま尺度として持っているものではないということには少し注意が必要かなと思います。

この三種の陶磁器の中でこの中国陶磁が一番上ですといったのですが、中国陶磁全体の中でいえばあまり上のほうじゃないグループに属す

るものなのです。東日本を含めて、武家の蔵骨器の中で通常、ランクが一番上になるものが、どちらかというと左下の白磁の四耳壺のほうです。これは四街道市長岡の堂庭遺跡(どうば)、千葉氏一族の白井氏の墓地ではないかというようにいわれているそうなので、納得できるようなランクだと思いますが、これは鎌倉の後半、十四世紀ごろの中国製の白磁の四耳壺です。したがって、この四つを比べたら、むしろこれが一番上、二番目が上の右側、三番目が左側で、四番目が真ん中みたいな、そういう見方ができるかなというように思います。

でも、これは先程いいましたように、本来、日常的に使っていた道具が蔵骨器として再利用されたのだということになります。では、日常的な状況を少し見てみようというのが次の話題です。鎌倉の唐物の話に入る前に、ちょっと振り返っておきたいのが、先程いいましたが、武家にとって唐物というものがどういう形で使われたのか。特に私がよくいつていますように、中国製の焼き物ならば、全部が唐物と呼ばれるような代物だったのではないということなのです。

私たちが発掘で遺跡を掘りますと、大量に白磁だとか青磁だとか、中国製のきれいな碗や皿が出てきます。私が昔一乗谷を掘った、もう五十年ぐらい前になるのでしょうか、掘り始めたころ、遺跡から青磁の茶碗などがぼろりと出てきますと、「ものすごいものが出ました」みたいな、そういうニュースが流れました。今、それをいう発掘者がいたら、それは眉唾で、もう騙りか、あるいは確信犯だと思ってください。実は中国陶磁は中世の日本においては日常的に一番たくさん使われた道具なのです。あつと思うかもしれませんが、実は焼き物の中でかわかけのような大量消費するものを除きますと、こういった焼き物の中で中国陶磁というのは、多く使われていた道具です。特に西日本の場合には、碗や皿の世界というのは、国産の焼き物はあまり手に入らないのです。そうすると、嫌でも中国製の白磁だとか青磁、あるいはその代わりに使われる漆の碗、皿類というものが使われます。したがって、中国製の碗や皿に驚



いてはいけない。

それでは、どういうものが本来、唐物と呼ばれていたような高級品なのかといいますと、ここに今、示しましたような袋物ふくものといっているような壺だとか水注だとか、あるいは香炉のようなものとか、そういう日常的な碗、皿ではない特殊なものだと思います。当時の人がどこまでを唐物といったのかというのは、実はよく分かりません。ですが、おそらくこういった特殊な使われ方をしていたものが、唐物の中のトップクラスだったというのは何となく分かるのですね。

これは奥州平泉ですが【資料3】、白磁の四耳壺。それから、白磁の水注。そしてこれは、釉薬をかけました褐釉かつゆうということには変な色ですが、陶器の四耳壺ということになります。これはもちろん平泉ですから、

十二世紀のものであります。ある意味、鎌倉よりも先んじて、東国で武家政権をつくった、その本拠で使われた焼き物ということになります。

そして、注目していただきたいのはこちらです。ここに大量に破片があります。こんなにたくさん焼き物があるという話になるわけですが、これはかわらけという土器の皿です。結局これは何なのかといいますと、これが酒杯、お酒を酌み交わす時の杯に使います。そして、こちら側の四耳壺、水注が酒器、これに酒をなみなみと入れて、そしてそれが座敷に飾られ、ここ

から酒が注がれていくという、そういう酒器、宴会の道具としてこれが使われているという、そういうことになります。

全く同じようなセットがここにもあります。これは会津坂下町あいつばんげ、会津盆地にある陣ヶ峰城から出たものです【資料4】。これも十二世紀のものであります。ここは伝説では越後城氏、越後ですごく力を持っていた御家人のひとりでありましたが、その館と伝えられている所でもあります。全く同じセットだというのが分かります。手前のほうに置いてある白磁の碗などは、先程いったように高価なものではない。そういう意味ではあまり見なくていいと思います。

この壺類と、ここに一つだけある緑色のもの、実はこれは高麗青磁の碗です。高麗青磁といいますのは同じ時代に朝鮮半島、まだ高麗という時代でありましたが、そこで焼いた青磁のことです。中国の青磁よりもよほど質がいいということで、大変珍重される、そういう道具でありました。これがセットなのです。そうすると、武家の初期の唐物威信財ごうぶつごうしんざいというのとは何かといいますと、酒器、宴会道具ということになります。

なぜ宴会道具が唐物の威信財になるのかという問題です。皆様、ご存じのように、武家の権力がどんな原理で形成されるのかといいますと、主従関係、主人とその従者という身分又は権力関係が契約により結ばれることで成立します。その時に何をするかというと、対面の儀式があつて、そこでお酒を飲み交わして、その契約が交わされます。皆様、もうお忘れかと思いますが、自分たちの結婚式を思い出してほしいと思います。私は神前で行いましたので、嫁さんと三々九度という杯事をいたしました。あれは私が夫で、あなたが妻だよという人間関係の契約であります。武家の館でやる時には、私が親分で、あんたは子分だよという、そういう関係が結ばれるということになります。

そうしますと、そういった権力関係を構築する上で重要な対面儀礼、そしてそこで使われる酒器というものに、はるばる海外から輸入した高級な焼き物を使う。これこそがまさに自分の権威を見せる一番いい場面



だったということになります。もちろん別の場面では、今度はお客さんをよそから迎えた時に、その客に対して同じように宴会を行います。その儀礼の時に、安物の酒器でお酒を出すのではなくて、そこでやはりこんなに素晴らしい物を持っているぞという、中国陶磁を使った宴会が行われる。これこそが権威の見せびらかし、権威を見せるやり方だということになるわけです。したがって、武家の場合には、まさにこういうところから主従関係の構築が始まっているのだというふうに見てほしいと思います。

『福富草紙絵巻』^{ふくとみぞうしえまき}がよく表現していると思うのですが、もう一つはそういう権威を示す威信財としてだけではなくて、富というものを示す道具でもありました【資料5】。菓物が盛られた青磁の大皿があります。

そして、こちらの棚には天目茶碗、お茶の道具があります。こういうものが飾られています。この絵巻物の中では、この場面は面白い話なのですが、本題から外れるので止めておきます。

貧乏人から突然金持ちになった時に、こういったものがあれば金持ちなのかということがここに象徴的に描かれています。美味しい料理、それから文化的な道具、そしてここに銚子が置いてあると思うので分かるように、酒器がありますので、酒と料理と温かい火鉢、暖かい部屋があつて、そして文化的な物が飾られている。これこそが当時

の富を示す指標でした。

一方、『松崎天神縁起絵巻』^{まつざきてんじんえんぎえまき}の播磨国の国司の館の場面には二つ、青い瓶のようなものが描かれています。これは梅瓶^{めいびん}という瓶です。上に紙でふたがしてあつて、その後ろに銚子があるのでお分かりのように、これは酒が入っている酒器ということになります。あとは一緒です。美味しい料理があります。ここにある大きな四角いのが火鉢ですので、暖かい部屋です。これこそが富の象徴だった。また初期のころの、武家が喜んで使っていた威信財ということになるわけですね。

これは十五世紀ごろの宴会の様子です【資料6】。宴会の席でいろいろやっているのですが、ちょっと絵が暗くて見えにくいので、これをスケッチに直しておきました。ここで行われているのが、琴や鼓の演奏をバックにかわらけと酒器でお酒を飲んでる最中ということになります。そして、ここでは今、銚子からかわらけに酒を注いでいますが、ここをちょっと見ていただきたいのです。ここに大きな壺があります。これが酒海壺^{しゅかい}（酒会壺）と呼ばれている青磁の壺です。酒海壺、酒の海の壺と書くのですが、まさに酒を入れておく道具。それから、右側に口の小さい瓶が二つ並んでいます。これがさっき見たお酒を入れた梅瓶ということになります。下のほうで見ますと、高麗青磁の壺や、梅瓶と呼ばれる中国製の白磁の瓶、こういうものであります。ここではまさに、その梅瓶から提子へと酒が注がれている状況が分かります。まさに宴会道具そのものが、実は富の象徴であり、権威の象徴だった。これが武家における唐物の一番トップの使い方だったということが分かります。

こういった器種の使い方の変化がよく分かるのが、実は瀬戸製品なのです。先程の三つ目の蔵骨器にありましたが、あの瀬戸の製品は東国向けに焼かれた製品でした。【資料7】を見てください。この辺りの製品ということになると思います。これらはみんな、先程の中国製の焼き物のコピーなのです。東国の武家に対して、中国製品が持てないような、

あるいはそれよりもちょっとランクが落ちてもいいから安く欲しいという人、そういう人のために瀬戸ではそのコピーが作られました。中国製の白磁の代わりが、こちら側の瀬戸の灰釉の四耳壺ということになりますし、こちら側は梅瓶のコピーです。

それから、十三世紀の後半になりますと、こういった灰釉だけではなくて鉄釉、鉄ぐすりをかける焼き物ができてるのですが、これが青磁のほうのコピー商品になります。そうすると、例えばこれは高麗青磁のコピーがこれということになりますし、酒海壺のコピーがこの三段目のもの、こういうことになります。それからここに青磁の盤、大皿がありましたけども、それをコピーしたものがこの左の二つということになります。

それからもう一つ、実は鎌倉期の道具の中で注意していただきたいのが、この洗面器のような浅い鉢です。洗せんといいますが、これは陶器ですが、こういった緑色の豊かな色をかけた多彩釉。これは福建省の地域で焼かれています。こういったものが伴います。この白磁の四耳壺や梅瓶、それとこの三彩の洗、これに青磁の酒海壺、こういったものを非常に御家人クラスが喜んで、どこの御家人も持っている傾向があります。私はこれを「御家人セット」というふうにいつておりますが、こういう道具だということになります。

そしてもう一つ、十三世紀後半になると変化があります。これまではまさに宴会セット、酒器セットが中心であったのですが、ここで初めて香炉だとか天目茶碗だとか、花瓶など、こういったお茶の道具や香の道具、花の道具など、そして部屋の間具としての座敷飾り、室禮しつれいといいますが、こういった道具が加わってくる。十三世紀の半ばから後半にかけての変化というのはすごく大きいので、後でまたいろんな話題の中で触れたいと思うので、覚えておいていただきたいと思っています。

・鎌倉の唐物

実は武士の都、鎌倉の中でも、十三世紀の後半というものに非常に大きな画期がありました。その画期は何かといいますと、承久の変といまして一二二一年に、後鳥羽上皇の京都の政権が鎌倉の政権、直接の対象は北条氏なのですが、北条氏を倒そうとする、大きな事件がありました。結局、鎌倉側が勝利します。それは何を示しているかといいますと、もともと文化や政治の中心でありました京都に対して、初めて東国の鎌倉、武家側が上に立ったということを意味しています。京都と鎌倉の関係が変わります。

それからもう一つは、鎌倉の中でも権力構造が変わります。これを境にして、当時はちょうど源氏三代の將軍の時代が終わっていますので、北条氏が執権という形で権力を握って、幕府として鎌倉を動かしていくようになります。それ以前はどうであったかといいますと、頼朝に代表される源氏の將軍の下で、千葉氏を含む御家人たちが直接主従関係で結ばれている形で幕府、鎌倉は構成されていたのが、執権を中心とするまさに鎌倉幕府と、それから全国の御家人たちが官僚的関係といえますが、そういう組織に大きく変わっていったのがこの時期だ、そういうことになります。後程また、それにも触れたいと思うのですが、この北条得宗に権力を集中して、いろいろな形で鎌倉を変えていこうとするわけです。鎌倉の唐物の話をしてみたいと思います。今の話の延長でいきますと、執権を中心とする北条氏一族が中心になって、貿易を動かしていきます。これは鎌倉に唐物が入ってきた窓口となる六浦の湊、現在の金沢八景の所ですね【資料8】。あそこに六浦という中世の湊があつて、これが鎌倉への唐物の玄関口です。そこには北条一門の金沢氏がいました。その金沢氏が建てたのがこの称名寺というお寺です。この称名寺を中心として、律宗や禪宗といった鎌倉の新しい仏教が動き出します。特に北条氏を熱心な庇護者として鎌倉に南宋系の禪宗を中心とする新たな仏教文化

が入ってきます。

一方、中国側は寧波^{ニンポ}という所が日宋貿易の湊になります。こういった形で十三世紀の後半になりますと、たくさん新しい宗教が到来しますが、重要なことは、僧侶は決して宗教だけを持ち込んだのではなくて、実は貿易そのものの担い者でもありました。あの円覚寺の開山の無学祖元も慶元府（寧波）の出身です。中国から偉いお坊さんたちが招へいされてきますと、当然そこで様々な中国の新しい文物が導入されてくるようになりました。宗教・文化と貿易はセットでした。まさに宗教のセンター、それから新しい文化のセンター、そして様々な新しい物質文化、これの受け皿としての鎌倉というのが全国的に大きな位置付けを持つようになってきた。それがこの時期だったというように思います。特に十五代執権金沢貞顕は典籍収集と交易に熱心でした。

ですから、先程十三世紀後半の大きな画期が、もちろんここだけとはいいませんが、鎌倉を唐物文化の中心にした、そんなふうに思えばいいのではないのでしょうか。

これは、北条の一人金沢氏の当時の当主貞顕の書状の一部です【資料9】。ちよつと字が小さくて申し訳ないのですが、「俊如房が無為の帰朝をした。」つまり、帰朝ということは中国へ行っていた称名寺のお坊さんが日本へ帰ってきた、めでたいということです。そして続きます。「当時、鎌倉中、茶以下唐物多々」。つまり「唐物がこんなにたくさんあふれているのだ」という、そういう話がここにやりとりされています。この俊如房は唐船に乗って中国へ行き、そして当然、たくさん貿易品とともに帰ってきたという、そういうことを示していると思います。

左のほうでは、同じく金沢貞顕の書状の一枚ですけれども【資料9】、「唐物等開かれ」、唐物の荷が披露されたとあります。こちらには「市立てせらるべき」とありますので、唐物市がここで開かれている。鎌倉というのはそういう所だったということです。非常にたくさん唐物が鎌倉へ集中している。そのバックにはまさにこういった背景があったと

いうことが分かる、そういう史料です。

一方、先程の文書と同じころの話だと思のですが、「唐船が無事に帰ってきたと。めでたい、めでたい」という話が出てくる【資料10】。この史料にも、「俊如房が乗船して、今、下向の云々」と。「博多までこの唐船で帰ってきた。そしてその後、今、鎌倉に向かっている」という、そういう内容の記事ということになります。

当時の国際港として代表的なのは博多港でありまして、ここへ一度入ってきた船が荷ほどきをして、そこでまた各地に必要な物が出ていくという、それが普通の形でした。したがって、先程のような六浦に向かつて荷物が入ってくる時に、直接入ってきた可能性も否定できないのですが、一方ではまた、一般的な商船であれば、博多で一回、荷解きをして、そこからまた全国津々浦々へ向かって中国からの輸入品が行くんだという話になります。

ただ、こちら側の下の手紙を見てほしいのですが、こんなことが書いてあります。「関東大仏造営料唐船の事」。これ、どういう意味かといいますと、関東大仏、鎌倉の大仏のことですが、この建立のため一三二九年に造営料唐船を出しています。造営料唐船というのは大仏だとか、あるいは寺院を造るために、その費用を貿易の利益で賄うために船を仕立てるといって、これが造営料唐船ということになります。中国へこの船を出すことによって、莫大な貿易の利益が上がります。それを最初から計算して、わざわざ船を仕立てる。造営料唐船を出せるということは、私的な船ではなく鎌倉幕府公認の貿易船ということになります。

鎌倉大仏というのは、鶴岡八幡宮の本地仏としての大仏ですので、当然これは幕府がその費用を調達するというスタイルが取られました。鎌倉幕府は大仏を造るに当たって、わざわざ唐船を仕立てて、この利益を上げようとしたのだということが分かるわけです。当然主導したのは北条氏です。

そういった貿易船の一隻が沈んでいた例が分かっています。これは新



安の沈没船といえます。現在の韓国の西海岸、新安^{しんあん}県という所があります。その海底で見つかった貿易船が一隻、調査されて引き上げられています。今の木浦^{モッポ}という所に建てられた博物館で船も展示されています。この船は中国年号、至治三年、一三三三年の六月直後ぐらいに沈んだというふうに考えられています。なんでそんなこと分かるのかというと、寧波を出たこの船の積み荷が残っていたわけですが、その中にたくさん荷札が付いていました。この荷札に記された年月日の中で、至治三年六月が一番最後になります。この船は半年間ぐらい中国側に滞在しているのですが、そこで日本から持っていた商品を売り、あちら側の商品を買って日本に向かう途中、耽羅^{たんら}海道、今の済州島の辺りから本来は博多のほうへ入ってくる途中で、おそらく台風に遭って、韓国の沖合まで流されてその海底に沈んでいたということなのです。

船の長さは三十メートル、幅は九メートル、積載重量は約二百トンです。大体、八室ぐらいの船室を持っていて、そこにたつぷりと荷物が積まれています。そのうち、中国陶磁は二万点です。ただし、先程見たような、例えば青磁の酒海壺、花生ですとか、高麗青磁の梅瓶、あるいは銅器等がたくさん乗っていました。こういった高価な物だけではなく、大半の物は普通の碗や皿でした。この荷物の中でもそういう特殊な物は、この中に収納されていますと表

示された特別な箱にきちんと詰められて、大事そうに梱包されていました。日元貿易の積み荷が一セットで発見されたということになります。

この荷札を見てみますと、全部で一〇九点ばかり出ているのですが、綱司、綱司と書いてありますのは船の運営と船長を兼ねたような、半分商人、半分船員みたいな人たちです。それが一番多いのですが、あとは八郎や道阿弥といった商人名だとか、あるいは阿弥名を持っていますことから、僧体のお寺に関係する商人のような者、こういった名前が荷札に書かれています。ここから、いろんな人たちが寄合船という形で、ある資金を持ってその船に乗り込み、そして共用の商船を仕立てることで利益を分配するという、そういう船だったということが分かるわけです。

ただ、ここで注意しなければいけないのは、東福寺と書かれた荷札、これは京都の東福寺ですので、これが四十一点、それからもう一つが博多の承天寺子院の釣寂庵が六点、あるいは宮崎宮、これも博多ですね。こういったものがありますので、先程の造営料唐船のように単一の目的の船ではないけれども、それら寺社が資金を多く出していたということも分かるわけです。ちなみに、東福寺も宮崎宮も、その直前に火災を受けて燃えていますので、おそらく両寺社の復興費用をこの貿易船で稼ごうといった、そういうことがあったのだろうという、こんな資料でもあります。大変面白い資料なので、また別の機会に、このようなお話ができればと思います。

また前回ここで行った講座でも紹介されたそうですが、新安の沈没船には全部で二十六トン、八百万枚の銅銭も積まれました。ご存じのように中世の日本では中国から銅銭を輸入して、それを国内で流通させるという方法で貨幣経済が回っています。したがって、約八百万枚というふうに計算されますが、この膨大な数の銅銭そのものも商品として、利益の一部ということにもなるわけです。

そして、たくさん的高級な陶磁器類が積み込まれていました。先程見ました、これが青磁の酒海壺、大型の花瓶、それから花生、それから高

麗青磁の梅瓶、そして青磁の大皿、大盤、香炉だとか天目茶碗。それからこういった焼き物以外にもたくさんのお物が本当は積まれているのです。例えば、こちら側は銅の花生ですし、船からはもう消えてしまったと思いますが、おそらくは絵画だとか典籍、そういったものも積まれているはずです。本来、当時の価値観からいえば、焼き物よりもほとんどそういった絵画資料だとか、あるいは典籍だとか、そういう唐物のほうが価値が高かったはずなんです。ただ、われわれ、考古学の立場でいうと、悲しいことに焼けても残る、地中にあっても腐らない焼き物ばかりが私たちの研究対象になるということになります。

例えばこれは、これは新安の沈没船に積まっていた品々ではないのですが、日本に伝世した中で、上のほうは宋版の『漢書』です【資料11】。いわゆる中国の三史と呼ばれている史書です。これは慶元版と書いてあります。慶元は元の時代の寧波のことですから、あの湊の辺りで作られている、そういう本だということが分かります。

そして画面下にある『備急千金要方』、ここに金沢文庫、そして米沢藩藩校の蔵書という二つの蔵書印が押されています。これは、中国の医学書です。もともとは、こちら側のほうは明らかに金沢文庫に入っていたものです。そしてその後、妙心寺を経て米沢のほうに持ち出されます。学者であった直江兼続に贈られ、そしてそれが後で上杉氏、米沢のほうへ入っていくという、そういう経緯をたどったようです。中国の本土にもほとんど残っていない宋版の『史記』など、こういった典籍が日本にはこのころ招来されて、たくさん残っているのだということになります。これこそが本来は文化人が欲しくてしょうがなかった唐物だったというように思います。

次に、お寺から武家に入ってくる品物について語ろうと思います。ご存じのように、鎌倉は、幕府側の権力者たちと寺院の関係が非常に密接なところなんです。そして、北条氏もたくさんのお寺を造りました。建長寺もそうですし、円覚寺もそうですし、そうした重要な寺院がみんな北条

氏などによって開基されています。そうすると、先程見たように、平泉などで見たような宴会道具だけではない、様々な室禮に使われるような道具が、武家の家の中にどんどん入ってくる契機をつくっていきます。

『慕帰絵詞』^{ほきえことば}という本願寺の状況を描いた絵巻があり、画面の真ん中に大きな青磁の花瓶が立っています。同じ物がこの称名寺に残っている花瓶です。この花瓶は一对で残っているのですが、それがこの写真です。こちら側は先ほどの新安の船に乗っていた同じ種類の花瓶です。高さが六十〜七十センチ、もうちよつとありますでしょうか。そのくらいの高さの物です。本来、武家の家には全然縁がなかったものです。こういう寺院の中で三具足^{みつぐそく}といいますが、花瓶と香炉と燭台、ろうそく立てです、この三つのセットが使われていました。これが武家の方の屋敷の中にも導入されていく。寺で持っていた様々な唐物の道具たち、そういうものが武家の中へどんどん入ってくるという、そういう状況が示されています。

『慕帰絵詞』のこちらの場面では、みんな、頭をひねりながら、唸っています。これは歌の会、和歌を詠む会の情景です。ここの押板といいますが、床の間のような所に柿本人麻呂の掛け軸が掛かっていると思われます。歌聖ですので、人麻呂の絵を掛けて歌の会をやります。その手前の所に同じように三具足が並んでいます。歌の会だとか連歌の会など、文芸的な集まりなども同じようにどんどん武家の中に入ってくるということを示しています。したがって、全然違和感なく、本来お寺の什物が武家の屋敷に入ってくるのだという、そのようなことになろうかと思えます。

これは、円覚寺の仏日庵という子院が持っていた様々な唐物を中心とする寺宝であります【資料12】。その目録が書かれています。興味深いのは、行間に様々な書き込みがあることです。円覚寺が古くから大変多くの良質の唐物を持っていたわけですが、その中に例えば、「千葉介招請のとき、これを引かるる」、すなわち、「千葉介が円覚寺へ来た時に、



これをくれといって、持っていったしまった」ということが書いてあるのです。何を持っていったかといえますと、蘆鴈ろがんの絵、二幅、それから胡銅の花瓶が一对、香炉が一個です。このような唐絵だとか銅器の花瓶、あるいは香炉といった物を武家が欲しいなと思った時に、手取り早くすごくいい骨とう品が手に入るのが、実はこういう古利でした。

寺のほうもいろいろな理由があつて、何かあると有力武士にプレゼントをするわけです。例えば、ここには足利尊氏が將軍になった時には尊氏にもプレゼントしていますし、もっとすごいのが尾張の守護、土岐頼康へは唐物漆器、漆器をたくさんプレゼントしているのです。それがこの辺に書いてあります。なぜ唐物を土岐にやったのかといえますと、土岐は尾張国の守護であるので、同国に対する権益に対して強い統制力

を持っています。円覚寺は円覚寺ができる時に、開基の北条時宗から尾張国の富田荘という荘園をもらっているのです。あるいは千葉でいいますと、時宗がもともと持っていた上総国のあひらのしょう畔蒜荘という荘園を、円覚寺に付けてやります。それをお寺の財産にしているわけですが、ちょうどこのころ、富田荘では紛争が起きていまして、在地の中でその所有をめぐって争っているわけです。それを何とか解決してくれと。円覚寺として土岐頼康に多少のプレゼントを渡してでも解決しようということ、わざわざその紛争解決のた

め、秘策を練ったというふうに書いてあるわけです。今でいえば賄賂かということになりますが、あのころ、賄賂って概念はないのでしょうか。今の政治家でしたらもう当然、首になるところですが、当時はこういうことを平気でやっています。そういう状況ですので、千葉介が持っていたというのは一つの例ですが、寺と御家人の関係が非常に深く、かつ、寺が持っていた重要な唐物類がそのまま武家屋敷の中でも使われているような、共通のそういう価値観で動いている状況が生まれていた。これが鎌倉なのだというふうに理解していただけたらいいのではないかと思います。

考古的な話を少ししたいと思います【資料13】。鎌倉の中で、こういった御家人クラスの屋敷をともに発掘した例というのは、実はあまりないのです。びっくりするでしょう。あれだけの規模を有する有名な都市の遺跡なのに、あまりない。唯一とはいいませんが、非常に大きく掘った遺跡がありました。鎌倉駅から西側に出ますと、南北方向の通りがあります。この道は当時、今小路という通り名で呼ばれていました。そして、山が迫っています。この今小路と山との間、現在の鎌倉市役所があるそのすぐ南側に当たりますが、御成小学校という小学校があります。これが今小路西遺跡です。

非常に大きな武家屋敷が二軒、南北に並んで発掘されています【資料14】。この武家屋敷が十四世紀前半のどこかで焼けているのは間違いないのですが、いつ、誰の屋敷かということははっきりとわかっていません。ただ、場所からいいますと、どうも当時の御家人の中で一番トップクラスだった安達泰盛の屋敷の可能性が高いと思われます。泰盛は霜月騒動（一二八五年）という政変でいったん失脚するのですが、安達氏はその後また復活しています。このように幕府で屈指の勢力を有した御家人の屋敷と推定される大きな屋敷です。

その資料を見てみたいと思います。屋敷は南北に二つあります。この図面は上が北なのですが、写真のほうは下が北です。したがってこの



模式図は、こちら側の北屋敷ということになります。ここの屋敷の特徴についていいますと、東側のほうに門があつて、ここから入りますと広場があります。入っていきますと小さな建物二つがあつて、屋敷の中の中心建物がこの1番の寢殿と5番の会所という建物です。間を溝が仕切つていて、寢殿の南側の庭は白砂が敷かれています。一方、会所のほうは、玉砂利が敷かれています。おそらく違う機能を持っていた空間であつたといえます。

この寢殿といますのは、先程の平泉などで説明した対面儀礼をする場、公式の儀礼をする場、これが寢殿です。それに対して、この会所は茶の湯をやつたり立花をやつたり、あるいは先程のような和歌の会、歌を詠む会をやつたり、連歌をやつたりという、芸能や文芸の集まり、寄り合いをする場所でありました。

ここの屋敷の中で、本当に鎌倉の中でトップクラスの焼き物がたくさん出ているのですが【資料15】、これが全部、実は会所から出ています。この会所は戦国期になりますと、明らかにもう会所という形でその建物が明確になっていくのですが、鎌倉時代にこの会所がはっきり分かるのは、おそらくここが一番早い事例だと思います。

そしてこの場所から出土した焼き物が、これです。もう皆様、見慣れました、白磁の四耳壺、白磁の梅瓶、そしてこれが青磁の酒海壺です。そしてこれが緑

釉の洗、破片しかありませんが、天目茶碗と茶入れです。この遺跡は、こういった唐物の数々が集中して発掘された場所でした。鎌倉後半期の鎌倉での唐物の在り方、あるいは唐物にとどまらず、屋敷単位、建物単位の陶磁器の在り方を一番よく示しているのがこの遺跡です。またこの遺跡はおそらくは、屋敷の広さからいっても、鎌倉幕府中枢の人間の屋敷と考えられますので、ある意味トップクラスの屋敷で使われた唐物というのはこのような道具だったということが分かります。

・鎌倉の千葉氏

そして、千葉氏についてです【資料16】。千葉氏の屋敷は鎌倉のどこにあったのかという問題ですが、よく分かっています。ただ、先程の今小路西遺跡、市役所よりもちよつと北に、この今小路を上がつていきますと、「千葉地」という地名が残っています。千葉氏の「千葉」に地面の「地」であります。千葉地というのだから、千葉氏の屋敷はここに間違いないでしょう。しかし、ここを小さく掘ったことがありますが、あまり立派な武家屋敷らしい遺構や出土品は、出てきませんでした。ただ、この千葉地のすぐ西側の谷、これは「千葉ヶ谷」と呼ばれていますので、千葉に縁がある場所なのだといいところまでは、どうも正解らしいということが分かります。ですが、地名だけでは悔しいから、なにかいい史料上の証拠があればと思つて、調べてみました。

そうしますと、当時の『吾妻鏡』仁治二年（一二四一）三月十七日条には、次のように書いてあります。前浜のほう、こちらですね。この砂丘地帯、前浜といいますが、前浜から火事が出たことでですね。この火事がどんどん広がつていって、甘縄の山麓辺りぐらいいまですつと燃えていった。甘縄という地名については、甘縄神明社がありますが、今、甘縄とはこの辺ではないかと狭く考えられているのですが、どうもそうではなく、もっと広い地域をいつていたのではないかとということが分か

ります。火がこの甘縄の山麓を広がつていき、数百軒が燃えたという記録が残っています。そして燃えた屋敷の中に千葉介の屋敷があったと記されています。

それから秋田城介、これは安達義景ですが、安達義景の屋敷も焼けたと記されます。また伯耆の屋敷もあつたと。これは葛西氏といわれていますが、こうした幕府の重臣たちの屋敷がどうもこの西側の山裾の所に並んでいた可能性がある。そしてそこに、千葉の屋敷もあつたのだということになります。

『随聞私記』永仁五年（一二九七）閏十月七日条には、佐々目の谷から火が出たという記録もあります。佐々目の谷というのは、この谷ですね。これが佐々目で、ここがいゆる甘縄ですので、ここから火が出て広がったというわけです。甘縄と千葉屋形以下、たくさん焼けたと史料に出てきます。これらの記事からは先程の今小路西、あれが安達の屋敷かもといっている人がいますが、もしかしたら当たりかもしれない。そして、すぐその近くに千葉介の屋敷もあつたらしいという、そんな気がいたします。千葉氏はご存じのとおり、常胤以来、頼朝を守って幕府創設にすごく尽力をしたトップクラスの御家人です。したがって、幕府内でのランクはすごく高かったはずで。

こちらは、『京都六条八幡宮造営注文』という面白い文献です【資料17】。京都六条の所に八幡宮がありました。この八幡宮というのは源氏の先祖であります頼義の館にあった神社なのですが、そこが焼け落ちてしまいました。当然ですが、源氏ゆかりの神社ですので、鎌倉幕府にとってみたら象徴的な建物です。これを復興するために全国の御家人に負担を課します。そのリストです。その時、復興費用を負担した御家人たちは「鎌倉中」というグループと「在京」、京都に住んでいる連中、それから「国御家人」の三つのグループに分けられていました。鎌倉中とは鎌倉に住んでいる、あるいは本籍地が鎌倉になっていることを示しています。今のわれわれと似ているのですが、本籍地、私は今、千葉へ

持ってきましたが、ついこの間までは神奈川県にありました。ですので、本籍地と実際に住んでいる所が同じかといわれると困るのですが、先程の言い方からすると、たて前の御家人を把握する帳簿みたいなものではないかと思っています。

この史料の中に千葉介と出てきます。千葉介はこの史料にありますように、本籍地が鎌倉です。したがって鎌倉の中に屋敷を持っていた。その一つの証拠でもあるのですが、この中でどれだけ六条八幡宮造営の復興費用を負担したかという、当時の執権であります北条時宗は五百貫文です。連署の義政が三百貫、名越朝時が二百貫、足利が二百貫、先程の安達泰盛が百五十貫です。千葉介は百貫文を負担しています。したがって、千葉氏のランクはかなり上ということが分かります。御家人クラスの中では一番上ぐらい。安達と並ぶか、少し下ぐらいですので、ものすごい金を千葉氏が負担しているということになります。

ちなみに、各国にいる御家人たちは、十貫文以下のほんの僅かしか負担していません。したがって、そういう面からしても、千葉介のランクは高いし、鎌倉が本籍地になっていることも納得できる。そしておそらく、先程の見方からいうと、どうも今小路付近に屋敷があつたのではないかという言い方も、あながち眉唾ではないという話になってきます。掘ってみなければ分からないというのが考古学ですが、掘ってみると、先程の今小路西遺跡と同じくらいの唐物類を持っている千葉介の館が見つかるかもしれません。

・御家人館の唐物

では、全国の御家人の館はどうなのかということについてお話しします。代表的なところを紹介します。これは金沢の外れにあります堅田館という、これも御家人クラスの館というふうにいわれていますが、そこで発掘された館の一つです。全て発掘されているわけではないのですが、東



側のほうに表門があつて、堀が変な形で囲っていて、この中に主要な建物があります。この建物群は、鎌倉御家人の典型的なタイプの一つの館です【資料18・19】。そこを掘ってみますと、このような物が出ました【資料20】。もう皆様もご存じのこれは梅瓶です。これは肩の破片しかありませんが、白磁の四耳壺であります。そして天目茶碗があつて、こちら側に青磁の大きな盤があります。青磁の酒海壺はないとのことですが、酒海壺と緑釉の洗があれば、御家人セツト三つ全部揃いました。そういうものが出土したのが、この館ということになります。

これは王ノ壇遺跡です【資料21・22】。王ノ壇というのは仙台の遺跡なのですが、ここは北条得宗領でありますから、出土した陶磁器も北条氏の一番中心的存在であつた得宗家の荘園の政所館の品々といういうことになります。同じようなセツトを、持っていることがわかっています。

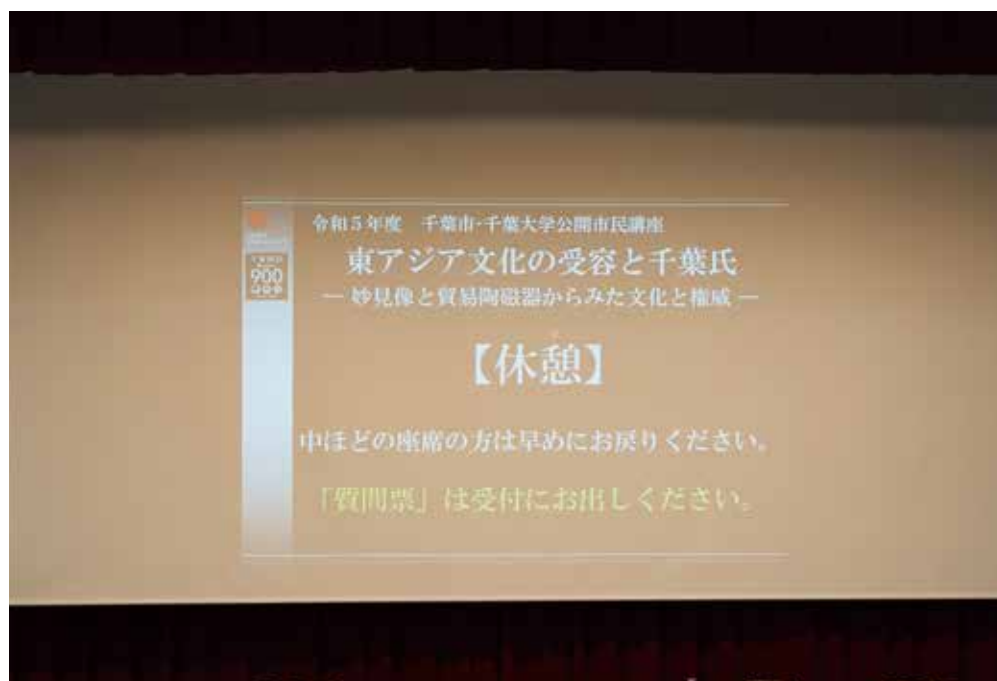
そして、西の方では承久の変の後、後鳥羽上皇側について西国の御家人や公家の領地が没収されます。それを東国の御家人たちが領地としてもらい、地頭として現地に入つて来ます。そういういった西遷御家人の一人が、肥後国、人吉^{さくら}荘へ入りました。相良氏です。もともと相良氏は遠江国が本拠ですが、彼がそこへ地頭として入り、館を造り、この人吉荘を支配するようになっていきます。そこを今、調査しているのですが、大変面白い

データが挙がっています。

そこでは館の発掘も面白いのですが、それよりも館の奥のほうに、東光寺という聖地があります。そこには、凝灰岩の大きな岸壁の所に武蔵型板碑が彫られています【資料23】。このように埼玉にある武蔵型板碑【資料24】が摩崖仏のように岸壁に彫ってあります。すごいものです。高さが四メートルぐらいあり、その脇を見ると、ここに穴倉が掘ってあります。いわゆる鎌倉でいうやぐらです。遠江国は板碑を持たない世界です。また、やぐらも持ちません。これらは相良氏の本領にはなかったものなのですが、鎌倉武士が西遷して地方へ行き、「俺は鎌倉から来た御家人だぞ」「地頭で来たぞ」といった時の權威のよりどころとして、鎌倉らしい装置を引きずっていった。それがこの武蔵型板碑であり、そして鎌倉のやぐらだったというふうに思われます。実は、このような例は他にないので、他の西遷御家人が皆やっていたのかといわれると、これも嘘っぽい話なのですが、取りあえずここでは非常にそれが先鋭的に見えるという世界なのです。

先程いつてきましたように、鎌倉御家人というものが全国へ散っていく中で、やはり同じランクの御家人層として、こういった価値観を共有する。そして、地方へ行つた時に、「俺は鎌倉の御家人だぞ」ということを見せびらかす。その一つの力になる道具、それが実は先程来見できた鎌倉の御家人セツトと呼ばれている唐物であり、あるいは相良氏のいうにちよつと特殊ではありますが、鎌倉のやぐらだとか、あるいはこういう関東風の武蔵型板碑といったような、鎌倉の匂いがぶんぶんするこういう物だったのではないかというような気がいたします。

ということ、時間が過ぎましたので、これで私の話は終わりにしたいと思います。



外山 小野先生、興味深いお話をありがとうございました。それでは休憩の時間に入りますが、ご質問のある方は質問票にご記入の上、先程と同様、受付へお願いいたします。 それでは、休憩の間にクロストークのしつらえなどをお願いいたしますので、よろしく願います。

千葉氏と鎌倉御家人の唐物

レジュメ

小野 正敏

武家と唐物

東国武士には荒々しいイメージが先行するが、各地の御家人の館を発掘すると、ごく少いが唐物と呼ばれた茶の湯・立花・香などの海外からの高級品の道具が発掘される。千葉氏の本拠は文字通り名字の地である千葉庄の中心「千葉堀内」にあったが、その館と推定される「御殿跡」は、残念なことに市街化されており、発掘調査もなく実態は不明である。この堀内を見下ろす戦国期の猪鼻城の土塁下層からは、鎌倉期の中国産褐釉四耳壺や瀬戸灰釉四耳壺、常滑焼壺などの蔵骨器が発掘されており、千葉氏との関連も推定されている。奇しくも、この3点は武家の蔵骨器の3ランクを示す品々で、もちろん中国製が上位で、さらに中国製のなかでも白磁四耳壺が最上位となる。

兼好法師は、「唐物は、薬の他は皆無くとも事欠くまじ」（『徒然草』）と、町に唐物が豊富にあふれるさまを皮肉った。かれら中世に生きた人々が、発掘資料のなかでどのランクのものまでを唐物と意識したのかはわからない。私たちが中世の都市や館を発掘すると、たくさんの貿易陶磁が採集される。その多くは日常使いの碗や皿であり、それに混じってごく少量の香炉や花瓶、先の白磁四耳壺など、特殊な器種がある。また、出土した貿易陶磁器の中には、高麗、朝鮮陶磁なども含まれることが多いが、戦国期の茶陶としての朝鮮陶磁や南蛮物を除くと、中世の人びとが意識して分けた記述がなく、唐物とは、おそらく海外からの高級舶来品といった漠然としたものであったと思われる。

中世の武家社会は、高級舶来品、いわゆる唐物に何を求めたか。城や館からはよく似た唐物が出土することに特徴がある。これらの唐物を「奢侈品」という人もいるが、高価なものならなんでもいいのではなく、その機能からいえば「みせびらかし」の道具として、同じ価値観を共有する世界で使用されることに意味を持つ。中世の新興勢力である武家こそが、権力の維持と文化的アイデンティティの両面で自分たちの新たな威信財の創出を必要としたといえる。私がいう「威信財」とは、それを所有し使用することで、所有者・行為者の権威や富を表徴するモノである。また、本来唐物には、絵画、銀器、銅器、漆器など多様なものがあり、むしろ陶磁器よりはそれらが唐物の主役でもあったが、発掘資料に残ることは稀である。

鎌倉の唐物

東国武士の都鎌倉は、質、量ともに都に負けない唐物が集まる都市でもあった。鎌倉では、京都とは異なる武家独自の儀礼や唐物志向が形成され、多くの中国文物が流通している。特に鎌倉後半にはそれが顕著で、その背景には鎌倉に南宋禅を選択した執権北条氏の政策とその主導者蘭溪道隆や無学祖元のゆかりの地である寧波が、日宋貿易の拠点でもあったことが大きい。執権北条氏は、鎌倉仏教のみならず唐物貿易においても強力な推進者であった。

平泉を滅ぼした源頼朝は、東国武家の棟梁として鎌倉に幕府を開府する。そして、奥州

戦争の犠牲者の鎮魂のため永福寺を建立した。そのモデルは、平泉の壮麗な寺院群、特に無量光院とそっくりである。源氏将軍3代の鎌倉は、町の姿だけではなく唐物威信財も平泉モデルの継承といえる。京都模倣のかわらけと唐物の白磁四耳壺、青白磁、福建省泉州の華南三彩洗、高麗青磁瓶子などの酒器を中心とする宴会セットである。武家の権力編成の原理は主従関係にあり、後に「式三献」として整備されるように、酒杯を交わす対面儀礼によって身分関係の契約や確認が行われる。その酒器に高級な中国陶磁を使うことで威信を示すのは武家にとって必然であった。

これがかわるのが、承久の変（1221年）を経て、執権北条泰時が実権を握ってからである。幕府・御所の移転をはじめ、都市鎌倉の大改造と連動する変化である。そこには源氏の本拠から武家の都への転換の意思がみられる。威信財にも、京都に対して優位となった権力交代と東国武家のアイデンティティーへの志向が映されている。酒器は、都の文化に憧れて導入した京都模倣のてづくねかわらけ（土器）から鎌倉以前の轆轤かわらけにもどされる。白磁四耳壺から梅瓶への変化は生産年代をうけたものであるが、さらにこれら宴会セットに加えて茶・花・香などの室禮セットが増加することに特徴がある。こうした変遷は、唐物をはじめとする中国陶磁のコピーを生産した瀬戸の器種構成の変化にも端的に反映されていることが確認できる。

この時期の鎌倉モデルの典型が、今小路西遺跡の発掘資料である。この遺跡は、築地塀で区画された南北に並ぶ大規模屋敷で、幕府の中枢に近い鎌倉のトップクラスの屋敷、一説には安達泰盛の屋敷とされる。北側屋敷の南半側のハレ空間には、東側に儀礼用の寝殿と白砂敷の前庭があり、溝で分離された西側には六角形井戸をもつ玉砂利敷前庭が広がる。これに面した建物から唐物威信財が集中して出土しており、寝殿とは別に、後世の会所に相当する茶・花・香・文芸などの寄合の場が既に分化し、重視されていたことがわかる。そこでは、白磁四耳壺や梅瓶とともに青磁酒海壺、青磁盤（大皿）、天目茶碗、香炉、花生などがみられ、泉州系の華南三彩洗や高麗青磁も多い。よくみると高麗青磁も瓶子や梅瓶ばかりが多く、そこにも京都や博多とは違う鎌倉の特徴があり、鎌倉武士の唐物嗜好とその価値観を雄弁に物語っている。

鎌倉の千葉氏

千葉氏をはじめ有力御家人は、本領とともに鎌倉や京都にも屋敷をもち往来しており、そうした文化にも精通していたことが知られる。千葉氏の屋敷の場所は、この今小路西遺跡の北に隣接する字「千葉地」付近が想定されている。千葉地の西側には千葉谷がある。

『吾妻鏡』の火災の記録などには、甘縄の安達義景の北に千葉介宅があったとされ、矛盾しない。千葉氏は『京都六条八幡宮造営注文』（1275年）には鎌倉に本籍をもつ「鎌倉中」御家人に含まれ、時宗500貫文を最大に、足利氏200貫、安達氏150貫などに続き100貫を負担している。そうした千葉氏の幕府内での位置を考えると、先の安達氏の館かとされる今小路西遺跡の屋敷群に並んで、内容的にもそれに近い千葉氏の屋敷を想定することもあながち無理ではないかもしれない。

鎌倉では、北条得宗や有力御家人たちと寺院の密接な関係があり、特に北条氏は唐物買

易にも熱心に関与していた。こうした状況が、本来は寺方の室禮であった三具足（燭台・香炉・花瓶）や青磁大型花瓶などを武家住宅へ導入し、威信財としての利用を促し、室禮セットへの傾斜を進めたものと推定される。この当時、住宅においては武家も寺方も大きな違いはなく、宗教用具を除けば寺院と武家の住宅の什物にも違いはなかった。

『仏日庵公物目録』（1363年）は、鎌倉円覚寺搭頭仏日庵が所蔵してきた絵画や什物など多くの唐物がリストされた史料として著名だが、その行間にはいくつかの追記があり、伝えてきた所蔵品の絵画、銅器、漆器、陶磁器などが、武家方に流出する実態を伝えている。そこには將軍足利尊氏、足利義詮、鎌倉公方足利基氏、尾張国守護土岐頼康などに並んで、千葉介（氏胤か）にも「蘆鴈二鋪、古銅花瓶一對、香呂一ヶ」が贈られている。土岐氏への唐物漆器の贈呈が円覚寺創建時に時宗がつけた寺領尾張国富田庄で起きた相論への便宜要請であったことを考えると、これも寺領上総国畔蒜莊龜山郷に関わるものかもしれない。いずれにせよ千葉氏をはじめ新興の武家にとって、豊富な唐物を所蔵する寺院は、貴重な唐物の供給源にもなっていたのである。このように千葉氏もまた多くの優れた唐物をもっていたと推定される。

御家人館の唐物

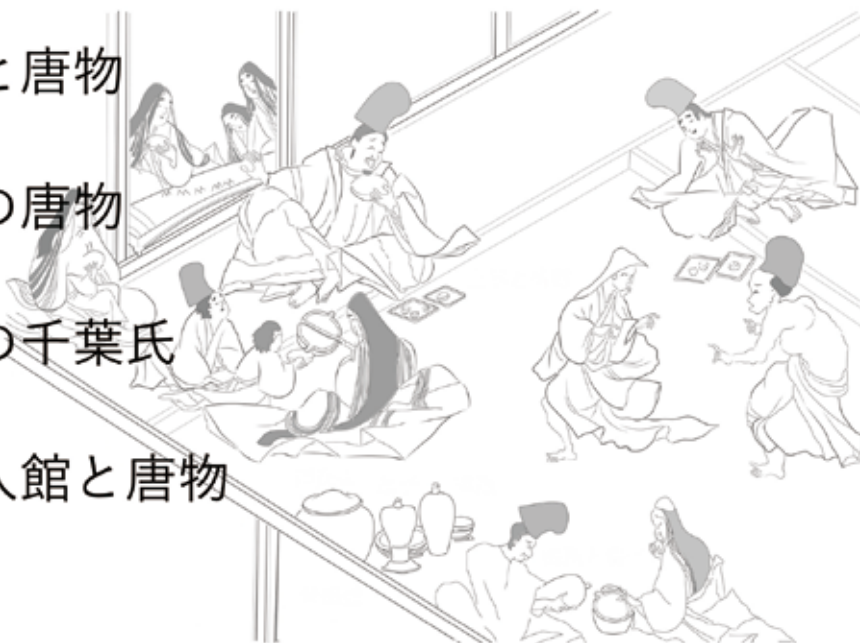
威信財の意味を考えると、鎌倉の唐物セットが各地の御家人やそれに準ずる館屋敷からも発掘されることに注目したい。そこでは白磁四耳壺や梅瓶、青磁酒海壺、青磁盤（大皿）、泉州系華南三彩洗などの「御家人セット」とでもいえる共通性がみられ、鎌倉モデルを積極的に意識したことがわかる。在地に生きる御家人たちにとって、鎌倉や源氏將軍とのつながりを誇示し、御家人同士の階層意識を共有、連帯を表現するために、それを唐物威信財に期待したのである。

特に承久の変を契機に、関東から列島各地に西遷、東遷した御家人たちが、新たな土地で支配権を確立するためにも御家人セットは必須の財産となったと思われる。肥後国多良木の地をもらい遠江国から遠隔の地へと一族を送り込んだ西遷相良氏は、球磨川のほとりに館と寺院を構えた。さらに奥まった山間に設定された聖域東光寺背後には、凝灰岩の崖面に4 m近い大きな武蔵型の摩崖板碑が彫刻されており、その崖下には鎌倉で見られるヤグラとよく似た岩窟を伴っている。本来、遠州には武蔵型板碑もヤグラも存在しないものである。相良氏にとっては、鎌倉御家人の象徴と意識された可視化した装置を平河氏をはじめ旧来の在地勢力に対して見せつけることに、御家人セットと同様の効果を期待したものと理解できる。

同じ意図は、モノとしての唐物とそれが使われたセットの場にも表現されていた。武蔵七党莊氏の本拠大久保山遺跡や加賀の御家人クラスの堅田館（金沢市）、北条得宗領の政所かとされる王ノ壇遺跡（仙台市）など、発掘された御家人や御家人クラスの館では、唐物とともに空間構成や建物の意匠にも、そうした鎌倉御家人と共通する要素が確認できるのである。

千葉氏と鎌倉御家人の唐物

- ・ 武家と唐物
- ・ 鎌倉の唐物
- ・ 鎌倉の千葉氏
- ・ 御家人館と唐物



▼資料2

資料1 ▲

千葉氏本拠「千葉堀内」



亥鼻城土壘下蔵骨器



長岡堂庭遺跡

千葉市立郷土博物館2009より



武家と唐物

奥州平泉



岩手県教育委員会提供



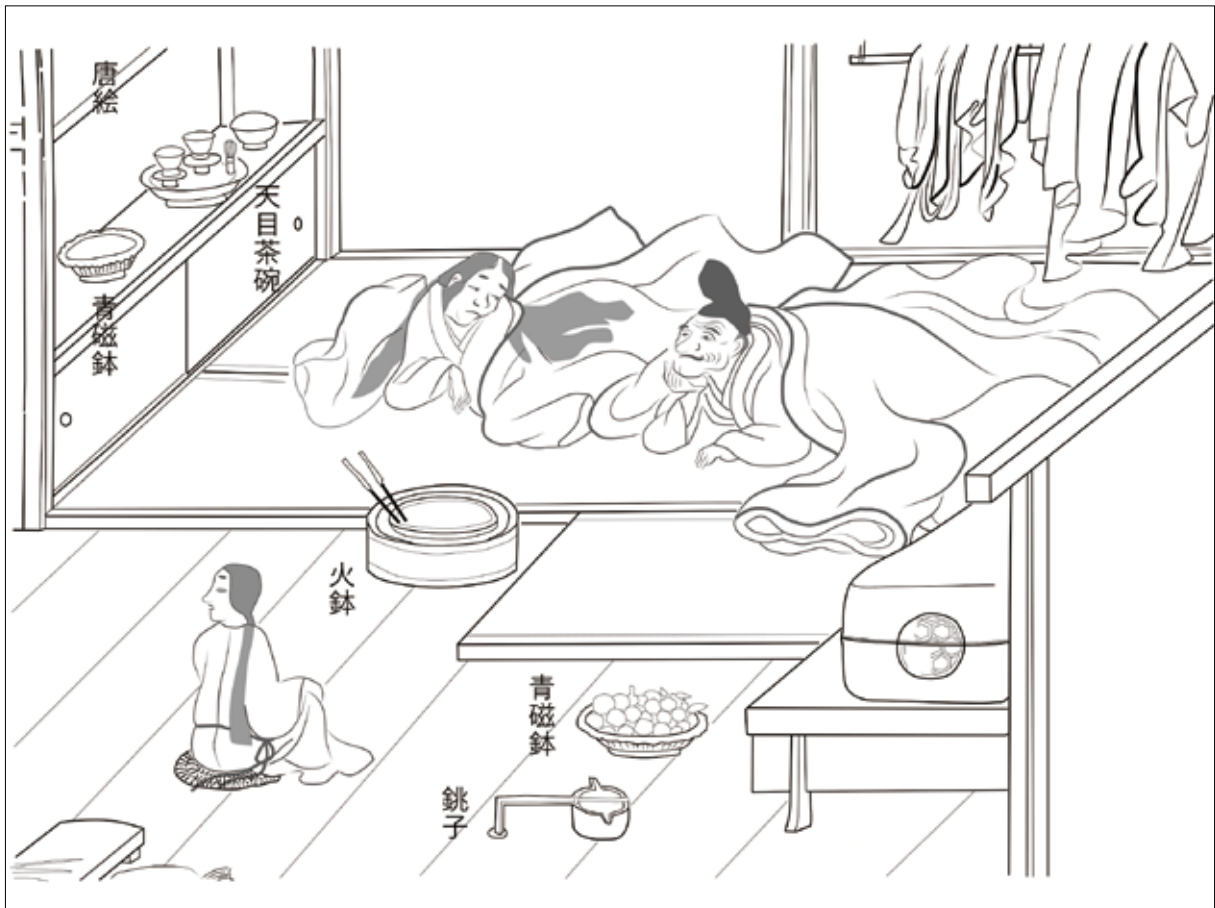
▼資料4

資料3▲

会津・陣ヶ峰城



会津坂下町教育委員会提供



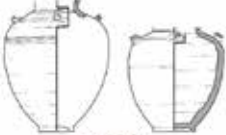
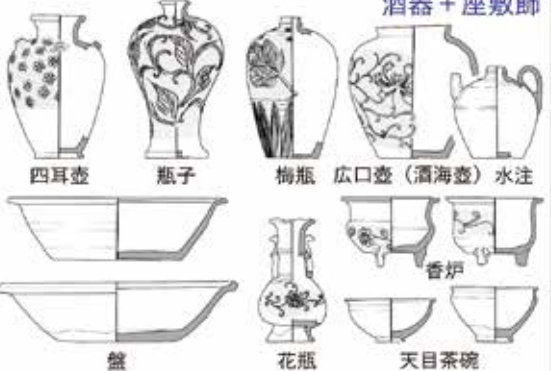
▼資料6

『福富草紙絵巻』から

資料5▲



15 世紀の絵巻物から

草創期 12 C 後半	酒器セット  四耳壺
前期 13 C 初～後	酒器セット  四耳壺 瓶子 梅瓶 水注 洗
中期 13 C 末～15 C 中	酒器+座敷飾  四耳壺 瓶子 梅瓶 広口壺(酒海壺) 水注 洗 香炉 花瓶 天目茶碗 盤

▼資料8

資料7▲



鎌倉の唐物

六浦と金沢称名寺



11 国宝 金沢貞顕書状(徳治元年カ月日未詳)〈金文五一〉
 称名寺所蔵・神奈川県立金沢文庫管理
 逐つて申す。

俊如房、無為の帰朝、返すがえす目出候。これに就
 き、当時、鎌倉中、茶以下唐物、多々、……。
 折節、……あるべきか。来たる冬・明春のころなど、
 沙汰あるべく候らん。其の間の事は、宜しく御計い
 たるべく候か。重ねて恐々謹言。

11 国宝 金沢貞顕書状(年未詳正月廿四日)〈金文一五七〉
 称名寺所蔵・神奈川県立金沢文庫管理

明日評定以後、参るべきの由思ひ給ひ候。唐物等開かれ
 候えかし。拝見仕り候わんと存じ候。明日若し御指合
 候わば、明後日夕方までは候わんずれば、明後日にても開
 かれ候わば、本意に候。盗人も恐れ覚え候。念ぎ、御沙汰
 えかしと存じ候。又、極楽寺のものはいかよう御沙汰候や。
 市立てせらるべきの由、聞き候しは一定に候か。承るべ
 く候。猶おなお、明日、明後日の間、開かれ候わば、悦び
 入り候。引き返し、承るべく候。恐惶謹言。

▼資料 10

資料 9 ▲

当時無殊事候之条、承悦候、京
 都又同前候、抑、唐船無為之帰
 朝、尤目出候、当寺之御大慶候、
 不可不喜候、但、俊如御房乗船
 已下向云々、定無為参着候歟、
 子細省略候、恐々謹言、
 五月廿四日 越後守(花押)
 明忍御房御返事

(前略)

関東大仏造営料唐船事、明春可
 渡宋候之間、大勸進名越善光寺
 長老御使道妙房、年内可上洛候、
 常在光院一切経あつらへ申候、
 僧をもわたされ候へきよし申候、
 愚状進之候、忽々可被付長老、
 返状をハ慥便宜ニ忽可給候、此
 道妙房年来対面したる人にて候
 程ニ申承候、可有御意得候也、
 (後略)

十二月三日



宋版「漢書」(慶元刊本)



「備急千金要方」
金沢文庫、米沢蔵書印

国立歴史民俗博物館提供

▼資料 12

資料 11 ▲

円覚寺「仏日庵公物目録」

仏日庵公物目録

(中略)

被進方々仏日庵絵以下事

四聖絵四鋪御賛 魚籃 馬郎婦 柳氏女 雲照女

寒山十得一对虚堂賛 松猿絵一对牧溪

犀皮円盆一对小 堆朱一对

(三五二)

親応三年四月十八日、長壽寺殿入御之時、依御引出物不足、被違割之注文別紙之、

(中略)

花鳥四鋪彩色 虎二鋪李迫筆延文四十一月廿一日

(康安二六月七日)(具筆・一三六二)

蘆鷹一对 崔白筆彩色

頼重

為尾州両庄沙汰、土岐光録方被進之、三ヶ度被違之、

土岐頼重

薬魚二鋪 同舎弟司農方被違之、返事在之、(具筆)「康安二六月九日」

(中略)

蘆鷹二鋪 古銅花瓶一对 香呂一ヶ

(氏原也)

(法竹)

千葉介招請之時、被引之畢、大喜和尚代

(中略)

(二五六二)

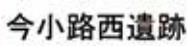
貞治二年四月 日

(後略)

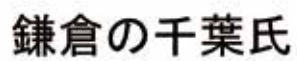
法清(花押)

『千葉県の歴史 資料編 中世 4 (県外文書 1)』二〇〇三より





資料 15 ▲



「京都六条八幡宮造営注文」



国立歴史民俗博物館提供

▼資料 18

資料 17 ▲

御家人館と唐物

領主館模型（堅田館）



石川県立歴史博物館提供



領主館模型
堅田館建物群

水溜から流れる遣り水？



石川県立歴史博物館提供

▼資料 20

資料 19 ▲

堅田館の唐物威信財



白磁・梅瓶



白磁四耳壺



中国産陶器壺耳部



天目茶碗



青磁盤

金沢市教育委員会提供

仙台市王ノ壇遺跡

「王ノ壇遺跡」仙台市教育委員会2000 による

I期:11～12世紀

II期:12後半～13世紀中葉

III期:13後半～14世紀

藤原氏に連なる在地領主の屋敷

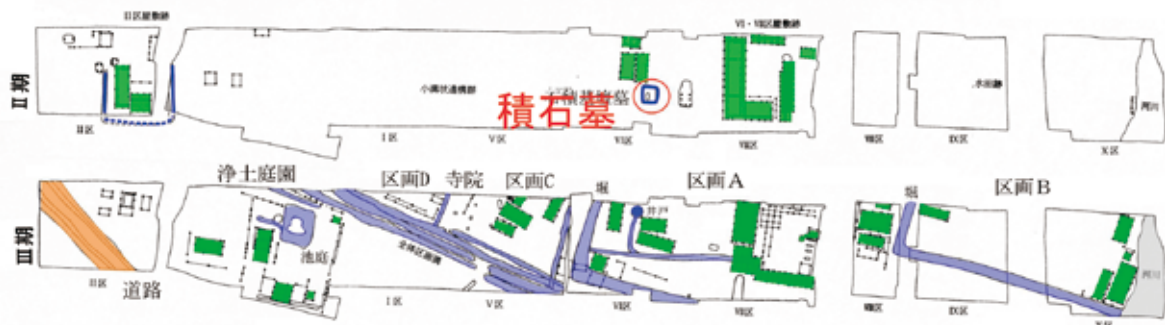
名取郡地頭和田、三浦氏段階

村・郷クラスの在地領主屋敷

北条得宗領、得宗家直轄の政所屋敷か

堀出現(13中葉～14世紀)

白磁四耳壺、水注、梅瓶、緑釉洗、手づくねかわらけ、渥美甕



堀区画・寝殿+侍所+地下蔵

▼資料 22

資料 21 ▲

仙台市王ノ壇遺跡



肥後・人吉荘
相良氏本拠

東光寺摩崖板碑



蓮華寺と館（多良木町教育委員会提供）

青蓮寺

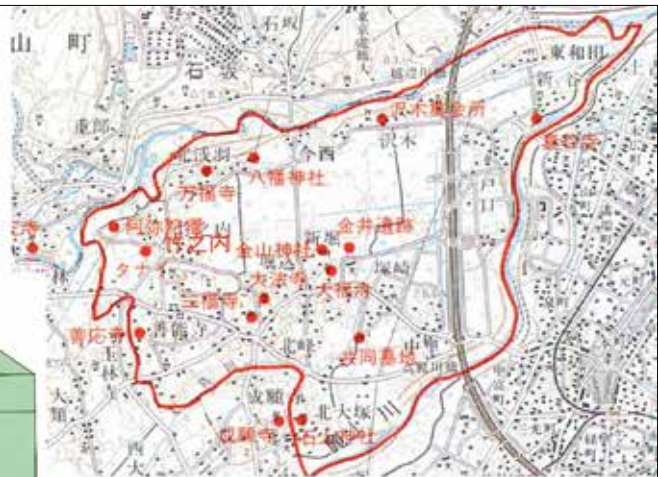


▼資料 24

資料 23 ▲

埼玉・坂戸入西
御家人浅羽氏の本拠

万福寺板碑（坂戸市教育委員会提供）



右は曩祖浅羽小大夫有道行成
道行成朝臣の為、其の子
孫等、彼の故墳について
造立し奉る也、伏して
願わくは、菩提樹茂り、
近く後昆を蔭い、本覚月
朗らかに遠く幽冥を照
らす也、
徳治二年丁未結制日
七代末孫比丘
慧見幹縁□□

遺跡名	梅瓶・ 四耳壺	青磁 盤	青磁 酒海壺	青磁 花生	青磁 太鼓胴盤	青磁 器台	天目茶碗・ 茶入・茶壺	元様式染付	華南三彩 洗・壺	高麗 青磁	世紀	備考
1 西条氏館	●			●	●				●		12～	千葉・東条氏
2 外箕輪	●								●		12～13	千葉
3 上浜田	●	●								瓶	13～14	神奈川・
4 安保氏館	●	●							●		12～14	埼玉・安保氏
5 大久保山	●								●		12～14	埼玉・莊氏
6 横地殿ヶ谷	●	●					●		●		12～15	静岡・横地氏
7 飛山城	●	●	●h	●	●						14後	栃木・芳賀氏
8 宇都宮城下層	●		●						●	瓶	14	栃木・宇都宮氏
9 葛山館	●	●			●		●		●		～15前	静岡
10 江馬館	●	●		●			●			碗	15中	岐阜・江馬氏
12 東氏館*	●	●				●	●				15中	岐阜・東氏
14 祇園城	●	●		●			●			瓶	15中	栃木・小山氏
15 浪岡城	●	●	●	●		●	●				16後	青森・北畠氏
17 江上館	●	●		●	●	●	●				15後	新潟・中条氏
18 至徳寺	●	●	●m	●		●	●	玉壺春			15後	新潟・上杉氏寺院
19 朝倉館		●	●s	●	●	●	●	酒海壺・盤		枕	16後	福井・朝倉氏
20 高梨館		●	●	●	●	●					15後	長野・中野氏
22 武田館	●	●	●h	●	●		●	酒海壺			16後	山梨・武田氏
23 八王子城	●	●	●h	●		●	●				16後	東京・北条氏照
25 駿府城	●	●	●h	●	●		●	酒海壺		瓶	16前	静岡・今川氏
26 大内館		●	●	●			●			枕	16後	山口・大内氏
27 湯築城	●	●	●	●	●		●			瓶	16後	愛媛・河野氏

▼資料 26

資料 25 ▲

千葉氏 本佐倉城出土の唐物

- I 郭 青磁盤
- II 郭 白磁四耳壺・梅瓶
青磁酒会壺・花瓶・盤・大香炉
華南三彩蓋、五彩壺
- III郭 白磁梅瓶、
青磁酒会壺・花瓶・香炉
華南三彩蓋、
- IV郭 白磁梅瓶、
青磁酒会壺・花瓶・香炉・琮型花生
華南三彩盤、
- V郭 白磁梅瓶、
青磁盤

火災後の城改修に伴う唐物の移動



『令和3年度国史跡本佐倉城講演会 記録集 城と城下にみる戦国大名の権威
一本佐倉、小田原、甲府』酒々井町教育委員会、2003

▼資料 28

資料 27 ▲

一乗谷の唐物



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館提供

「クロストーク」

外山 信司（以下、外山）

お待ちしております。それでは、ただ今からお三方の先生方によるクロストークを始めさせていただきます。なお、登壇していただくのは、先程ご講演をいただきました濱名先生、小野先生、そしてコーディネーターの山田賢先生です。先生は千葉大学の大学院の教授を務めていらっしゃる、副学長でもいらっしゃると思います。なお、山田先生のご専門は中国近世史ですので、きょうのコーディネーター、進行役として最適の先生かと存じます。それでは先生方、よろしく願いいたします。

山田 賢（以下、山田）

ただ今、ご紹介にあずかりました千葉大学の山田でございます。ここからは私が司会進行という形で、お二人の



先生方に語り足りなかったところを存分に語っていただこうと思っているのですが、時間は三十分しかございません。存分に語っていただくには、まだ二時間はおそらく必要なのですが、そのようなわけで、全てのテーマや残されたテーマについて語り尽くすことはできないのですが、そこはご了承をいただきたいと思います。

早速ですが、皆様からたくさん質問票をいただきました。ありがとうございます。したがって、このクロストークの中では、私がお二人の講師の先生方と対話

をするというよりも、むしろ私が皆様になり代わって、ご質問票を代表する形でお二人の講師の先生に問い掛ける、どちらかといえばそのような形で進めたいと思っています。それでは濱名先生、それから小野先生、どうぞよろしく願いいたします。

さて、先程も申し上げましたように、かなりたくさん質問票をいただいておりますので、早速いくつかを私のほうで選んでお二人の先生方にお尋ねしていきたいと思います。まずは時代のつながりという観点、お二人の先生からそれぞれ信仰、それから唐物という形で中世の千葉氏のある側面を語っていただいたのですが、当然のことながら、それが突発的に現れたわけではなく、前の時代にはどのような形であって、それが新たにどのようなように作り直されたのか。そしてそれが次の時代に、どのように受け継がれていったのかという観点が必要ですし、その観点からのご質問、これもたくさんいただきました。

そこでは濱名先生に、おそらく前の時代の信仰とのつながりという側面になるのだろうと思うのですが、このご質問をお尋ねしたいと思います。質問を読みますと、「市原市稲荷台遺跡の北斗七星の形に並ぶ古墳との関係について、お話を伺えるとうれしいです」ということで、稲荷台遺跡、北斗七星の形で祭祀を行っていたということが、おそらくこれ、前の時代からの関連性ということもつながってくるのだろうと思いますので、まずは非常に具体的なことなのですが、ここからまず濱名先生にお答えをいただければと思います。では、濱名先生、よろしく願いいたします。

濱名 徳順（以下、濱名）

自分の資料の最後の所に、市原市の稲荷台遺跡の円丘祭祀遺跡ということで図面を挙げさせていただきましたが【資料13】、これはいわゆる国分寺や国分尼寺の近くですね。ということは、上総の国府が近くにあったことが推測されます。上総国府の位置はまだはっきりしていないわけですが、国分寺、国分尼寺からそんな

遠くない所に国府もあったというように考えることができるわけですが、その傍に古墳を北斗七星の形に見立てて、そこに建物を建てたり、あるいはそこで灯明を燃やすと。これ、燃燈供養というのですが、こういったようなことをやっていた遺跡があると。年代的には九世紀から十世紀にかけて、そういった祭祀が行われているということが分かっています。

これ、図面をご覧になっていただいても、明らかに北斗七星の形に見立てているというのは、もちろん、もともと北斗七星の形に古墳を造ったということではないのです。古墳があった中で、七つ、あるいは八つの古墳を選んで、これを北斗七星の形に見立てて、そこで祭祀を行っています。これは場所からして、国分寺や国分尼寺、そして国府が非常に規模の大きな祭祀遺跡であるということもありますので、上総国が主導しながら、こういった北斗七星祭祀、妙見祭祀につながるような、その前身ともいえるような祭祀が、平安時代の前期から中期にかけて行われていたというようなことを確認をすることができると思われます。

実際に、古代の資料を読みますと、盛んに天空コントロールを祈念するため、妙見やあるいは七仏薬師、あるいは北斗、こういった神仏に対して様々な儀礼を行っているということが分かっている。その一つのバリエーションとして、この上総の稲荷台遺跡を捉えることができるのではないかと考えています。

そして、それを受け継いだような信仰が、その後も千葉の地で展開をしています。それは、千葉市の平山の東光院様にある非常に特殊な七仏薬師像です【資料12】。こちらは十世紀末から十一世紀初めぐらいにかけての造像であろうというように考えることができます。これはこの時期の県内の仏像としては圧倒的にレベルが高くて、また、規模も大きいものでありますから、おそらくは私は伝承どおり、ある種、千葉氏の先祖ともいえる上総介忠常が関わった造像ではないかと考えています。上総介忠常という人物は上総介という称号も示すように、上総国府とも非

常に関わりの深い人物でしたので、上総国府で展開をしていた北斗七星信仰のようなものを、彼がそのまま引き継いで、この七仏薬師信仰というようなものに展開をしていった可能性があると思われます。

先程、千葉氏が中国の道教の真武神を導入したという話を申し上げましたが、全く何もないところにいきなり中国からそのようなものを導入して、みんながそれを簡単に信仰するかとか、そういうわけにはなかなかいかないわけですよ。やはり、先祖が持っていた信仰を受け継いだような形で、しかもそれが軍神として自分たちの武士団の信仰として適したような形になるものであることが必要なわけです。しかも、それによって先祖とつながることができる。

これは北極星信仰、北斗七星信仰ということによって、自分たちの祖であるところの忠常、あるいは伝説的なレジェンドであるところの良文や、平将門までつながることができるというような、これはもう途中からは伝説的な世界になってしまいうのですが、伝説上のそういう人たちとも北斗星信仰を介してつながることができる、千葉氏は考えたのではないのでしょうか。中世の武士団にとって血縁というのは、正嫡であるとか、これは非常に重要なものであったと思いますので、千葉氏は忠常とか、あるいは上総国にもともとあった、あるいは両総平氏がもとも持っていた北斗信仰のようなものを受け継ぐ形で、それも換骨奪胎しながら中国から、東アジアとの交流の中から新しい像容を、あるいは新しい信仰を導入していきながら、千葉妙見というものをつくり上げていったのではないかと考えられます。

そういうふうにして考えていくと、先祖ともつながることができる、新しいものも獲得することができるということ、この千葉妙見という信仰というのは、千葉氏という武士団にとっては大変便利なツールだったのかなと、そのように自分は思います。

山田

ありがとうございます。稲荷台遺跡の北斗七星から大き



く話が今、発展しましたが、非常に重要なご指摘、平安時代にも既に北斗信仰、北辰信仰というものは存在した。それが受容され、中国との交流によってさらに変容し、武家にふさわしい形につくり替えられていき、新しい伝統がまた形づくられていくということを、ここではお話しになったのだというふうに理解をいたしました。

そうすると、もう一つだけ、濱名先生について質問があります。武家にふさわしい形へと北斗信仰がつくり替えられていく過程で、真武神という特有の形がつくり上げられていくわけですが、それに関連するご質問です。「千葉一族ゆかりの妙見像は童子の姿をしています、童子として表す意味はなんでしょうか」というようなことが質問として出されております。あるいはまた、「片足で立つ像の意味はなんでしょうか」。これは前の時代のものでしょうかね。真武神の姿自体に関するご質問、いくつかございますが、これに関してはいかがでしょう。

濱名

まず、中国の真武神は必ずしも童子形というわけではありません。童子の姿に見えるものもありますが必ずしも童子ではない。他にも違う所があるのです。例えば中国の真武神の場合は、裸足なのですが日本の妙見は必ず靴を履いているとかなど、そういたいくつかわりがある。像容にしても、道教の真武神をそのまま妙見として受け入れたわけではない。やはり少し、自分たちの信仰に都合のいいようにいろいろと改変して導入をするのです。

その童子であることの意味なのですが、まず、戦場に降りてきて加勢する時に、どうでしょうね。立派な神様が戦場に降りてきて、矢、拾ってくれるというのは、ちょっとイメージがおかしいと思うのですね。やはり日本の場合、ずっとそれまでの信仰を見ていくと、神の使いは、神が自分自身で来るのではなくて、何かに姿を変えて地上に降りてくるというところがずっと伝統の中でありますので、やはり神自身が現れるのではなく、童子に姿を変えて、童子に垂迹^{すいじやく}して現れてくるというように変えていったのではないかと考えています。

髪型も、いわゆる被髪という長い髪の毛というのは、日本では童子の髪型というふうに取り上げることができそうですので、そういった意味で、童子にして出てきたほうが軍神としては都合が良かったと。天をコントロールするには、童子じゃ、少し力が足りないような感じかもしれませんが、戦場に出てきて矢を拾うのには童子が非常に都合が良かったというふうに思いますので、そのようにして真武神から姿を変えて日本に導入をしたと思われるわけです。

それから、裸足で出てくるというと、ちょっとやはり日本ではまずいようですね。やはり高貴な童子の姿で現れないと駄目なのです。卑賤な童子の姿で神が現れると、ちょっとこれはまずいので、やっぱりちゃんと靴を履いて出てきたほうがいいということで、裸足じゃなくて靴を履いて出てくるということに変わったのではないかと思います。

それから、片足立ちの話ですが、これには二つ意味があつて、一つは走っている姿ということがいえると思うのです。天から走ってきて、夜の間にバーツと地上を見て、天にまたバーツと帰るので、走っているのです。そうすると、普通に立っていたり座っていたりすると都合悪いので、片足立ちするというのが一つの意味です。

あともう一つは、天をコントロールする神であるという時に、禹歩^{うほ}というのですかね。よく相撲で土俵入りの時などに、なんか変な動き方をしたりして、その場を鎮めるような歩き方というか、変な舞踏のような、

土俵入りみたいな、ああいうようなものが道教にでもあるのです。その禹歩を踏んでいる、舞踏している姿を片足立ちで表現をしていると。だから天の中心にあつて、他の星を従えるという時の妙見の片足立ちというのは、禹歩、舞踏を表しているのではないかというふうなふうに考えることができる。だから、片足立ちには二つ意味があるというふうに、自分は思います。

山田

ありがとうございます。今のお答えの中からも、繰り返しながらありますが、前提として既に北斗信仰というものがあつたということ。それが武家にふさわしい形につくり替えられていき、新しい武家の伝統という形で、その後も継承されていくという大変重要な観点が示されたと思っております。

これに関連しまして、小野先生へのご質問ということになります。一つは、あらためて武家における唐物の意義。つまり、「武家にとつて唐物はどのようなものであつたのか」ということの再確認と、それからもう一つ来ている質問で、「武家の威信の象徴である唐物や中国陶磁は、西日本からも出土しているのでしょうか」という地域性の問題。実は、この地域性の問題というのは、時代的変遷の問題とも関わってくるのではないかと思われまので、ぜひ小野先生のほうから語り足りなかつたところ、どのような形でこの後、武家の伝統が展開していったかということも含めて補足をいただければ幸いです。

小野 正敏（以下、小野）

先程の質問の二つ目の陶磁器の出土は東日本だけの話ですかということですが、そんなことはありません。日本全国、掘ってみると似たような陶磁器は出てまいります。したがって、それは決して東日本、特に東国武士の中でつくられていったものではないですが、東日本の武家の中でそれが採用されていって、ある程度、武家的な嗜好が成熟してまとめられていく。そういう意味で、さっきの信

仰の話と全く一緒なのですが、もともとあつたものが武家風にアレンジされて、自分たちの論理として使われやすい形。そしてそれがあとで便利だという形の使い方に変わっていくのだというふうに考えてもらつていいと思います。

例えば、もともと、白磁の四耳壺にしたってそうですし、青磁の道具にしたってそうですし、京都でも出ますし、博多でも出ますし、全国津々浦々、方々で出ています。ですから、一個一個を見た時にはそれほど大きな意味は、ないのですね。質の良さだとか鎌倉への集中度、いろんな問題があるのですが、本日は唐物という話が主となりましたので触れなかつたのですが、平泉のスライドをお見せした時に、大量にあそこにかわらけ、土器のお皿があつたのを覚えていらっしゃるでしょうか。もともと、かわらけを使って宴会をするというのは、京都の公家の文化でも行われていました。

ですから、唐物の道具もそうですし、公的な酒宴でかわらけを使うというやり方そのものも、決して武家の中から生まれたことではありません。いろんな儀礼を含めて、中世の新興勢力である武家は、皆、京都の公家のまねをします。儀礼にしてもそうですし、年中行事もそうですし、いろいろなものを公家社会から導入してきて、自分ら流に使いやすいように形を変えています。

さっきいいましたように、平泉で最初に酒器として白磁の道具セットと、それからかわらけを使うというふうになりましたが、その時に使つたかわらけというのは、地元にはもともとなかった土器のお皿なのです。京都で当時使われていた手づくねという、ろくろではない技法で作つていた京都のかわらけを持ち込んで、平泉で作つていくというやり方をします。

それは鎌倉も同様です。頼朝段階、鎌倉の前半の段階のかわらけというのは、まさに京都模倣のかわらけを熱心に導入してきて、そして唐物酒器セットを中心に対面儀礼という形で武家の儀礼の中に取り込んでい



くということをします。大変面白いのは、それが源氏將軍が絶えて北条氏の段階になって、もう京都は超えたと思った時に、もともと東国ではろくろのかわらけを使っていたのですが、あんなに憧れて導入したのに、ろくろかわらけに戻ってしまう。ようやくその時に、京都の縛りから外れて、関東独自のスタイル、かわらけさえもそういうふうに変わっていくのだということになっています。そんなふうには、その時々々の権力によって、都合が良くいろいろなものが持ち込まれてきますが、その後、それが自分たちにとって不要になっていった時には、また鎌倉風に変えていくのだということ、それが道具だと思うのです。

ただ、さらに面白いのは、戦国時代です。時間があればといったのが、結局時間が取れなくて終わってしまったわけですが、千葉県でいいますと、千葉氏が戦国時代に本佐倉城を築きます。本日も本佐倉城を発掘した方がみえていますが、本佐倉城の陶磁器を見ていると、あの鎌倉時代に威信財として使っていたものとはほぼ同じようなセット、そしてあのころの骨とう品を所有していて、本佐倉城の千葉氏の威信財としてそれが使われていることが分かりました【資料26】。

戦国時代の武家にとって、武家権力のルーツは源氏將軍にあると思っているわけですね。ですの、頼朝がつくってきた鎌倉文化、そしてその鎌倉で行われていた武家儀礼、さらにそこで使われていた道具、これを使うことによって、自分たちはある意味、千葉氏だけではなく武家としてのルーツであ

る文化をそのまま継承して、それが戦国時代にもずっと生きていったということになっています。一乗谷の朝倉氏にも同じ状況が確認されます【資料25・28】。

これは少しずつ形を変えているのですが、戦国どころか江戸時代になっても同じような儀礼が行われていくように、後世までずっとつながっていきます。さっきの酒器とかかわらけの儀礼、戦国期になりますと「式三献」という形で残るわけですが、考えてみれば今にも残りますと言えるくらい、ああいった儀礼が広く伝わってくるというのも、おそらくその一つの例だと思います。

かわらけは形は変えるけど使われてきました。ただし、捨てていったものもあるということも注意が必要です。鎌倉期にもう一つの変な道具がありましたね。緑色の釉がかかった洗という洗面器みたいな陶磁器があったと思うのですが、あれだけはなぜか戦国期になると、残りません。白磁の梅瓶とか四耳壺、それから青磁の酒海壺、それから茶の湯道具はみんな継承されていくのですが、なぜかあの緑釉の洗だけは残らないというように、時代とともに変化するものと、それからずっと継承されるもの、そんなものがあるのだということになります【資料25】。

千葉氏という固有の武家だけではない話になってしまったわけですが、そういう形で武家としての嗜好性といましようか、そういうものが鎌倉あたりで完成されて、そしてそれがずっと長く継承されていくという意味では、先程の宗教などの話ともつながるものがあるのではないかとそんなふうに思います。

山田

ありがとうございます。つまり、唐物というのは単に物質というよりも、それをめぐる文化体系であって、かつまた、武家としての伝統としてその後も受け継がれていくという、大変興味深いお話を伺うことができました。

後世への伝統の継承という観点から、濱名先生へ「千葉氏の教育施設



はその後、例えば戦国期などにもあったのか」という問題と、それからもう一つ、大変魅力的な人物、「千葉寺の了行という僧侶は一体どういう人物だったのか」ということ。また、「千葉氏の一族で中国に渡航した僧侶というのは、一体どういう環境の中で育って、どう動いたのか」ということ。分かる範囲で教えてください」というご質問が来ております。いかがでしょうか。

濱 名

まず、前のほうの質問ですよ。教育機関という話ですが、やはり千葉寺というのが私、非常に大きな存在だったというように思います。『檀那門跡相承資』という資料がございます。中世の談義所、いわゆる天台系の学問所、近世になるとそれは檀林という言葉でいわれるようになる。中世では談義所というようにいいます。そこはいわゆる講義が行われている、それに対して議論が行われる、そういう場所を談義所といったのです。その談義所について記した『檀那門跡相承資』という資料を読んでもみると、明らかに千葉寺であると思いますが、千葉が中世の仏教学の中核の一つを担っているのです。これはもう鎌倉ぐらいからそのような展開があるわけです。

やはりその背後にあったのは、千葉氏の財力ではないのかなと思います。例えば、先程も申し上げたように、千葉寺了行というような人物が中国まで渡って、いろいろな仏典その他も獲得して、求得して帰ってくるができるの

も、それにはやはりスポンサーがいないとそういうことはできません。千葉氏の経済力というものが千葉寺をバックアップしている。私は千葉寺が千葉氏の中世における氏寺であったというように思っております。この金沢文庫文書などからも、千葉寺という所にいろいろな地方から多くの学僧たちが集まって、学問的な研究が進んでいたというようなことが分かっていきます。

もう一つの房総における核というのは、はぶのしょう 埴生荘の龍角寺であったろうし、あと、安房国だと清澄というような、上総国だと若宮八幡とか、こういういくつか核があったと思うのですが、その中で特にやはり千葉寺というのは非常に大きな、重要な学問センターというか、そういう場所だったように私には思えます。

それから千葉寺了行については、もうまさしく捨財賦で確認できるように千葉寺に籍を置いた坊さんであったということは分かっていますし、それから千葉氏の系図の中から、千葉氏の家臣団の原一族の出身であるということも分かっている。原氏というのは、前の原氏と後の原氏がいて、後半のほうの原氏というのは、千葉氏の一族ということになると思うのですが、古い時期の原氏というのはもう少し前に両総平氏の中で千葉氏とは分かれていますので、もともと千田荘ちのだのしょうのほうに本貫を持っていて、鎌倉時代に入ってから、もちろん血縁関係はあるのですが、千葉氏の家臣団に組み込まれた一族。結構有力な家臣の一族であったと考えられます。了行はその出身ということが分かっております。その辺は私よりも歴史家で詳しい方がいらっしゃるだろうと思いますので、そういう方に聞いていただければと思います。

この了行は、もちろん京都にもやがて拠点を持って、住坊を持っていたということが先程の文書でも確認ができますし、そして入宋した時には、どうも九条家の関係のお坊さんと一緒に九条家とも非常に関係が深かった。

そして、幕府転覆の話になるわけですが、幕府といっても、いわゆる



北条氏の独裁を転覆しようというような企てを行ったのだろうと推定できるのです。北条氏があの時期、特に宝治合戦以降、もうほとんど独裁的な体制を幕府に対して持つわけですが、それによって退けられた摂家将軍、頼経、頼嗣、この人たちはいわゆる九条家から出ています。また、その時、宝治合戦によって上総千葉氏も滅ぼされています。千葉氏も九条家も北条氏の独裁体制に対しては腹に一物あったわけですね。一物どころか、二物も三物もあったと思うのです。当時の貴族や武士はみんな北条氏への反感を持っていたのだと思うのですが、特に千葉氏と九条家は反北条というように当然、結び付きやすいし、なんということもない人間が幕府転覆なんか試みることはできませんので、千葉氏と九条家、これが結び付いていたとなると大事になるわけです。したがって、あの事件は物騒な事件だったというふうなふうに考えられると自分では思います。

山田

ありがとうございます。では、そろそろ時間も近づいております。最後にまとめてみたいと思います。本日のお二人の先生方のお話というのは、濱名先生は、人と信仰という、いつてみれば社会のソフトに当たる部分。それから、小野先生は人と物、財というハードに関わる部分というところから、ともに武家社会の伝統というものを語っていただいたのです。まとめに代えまして、ぜひ、日本の中世都市遺跡を俯瞰してこられた小野先生に、最後に

考古学的に見た中世東アジア世界、了行のように海の向こうとつながる人間というものが実はたくさん現れていた。そういう中世というのは、流動的なネットワーク型の社会だったのかもしれないと、今、いわれているのですが、都市遺跡というところから見た中世東アジア世界、列島というものについて、最後に何か、難しいかもしれませんが、まとめの言葉をいただければと思います。よろしくお願いします。

小野

まとめとしてはすごく難しい話だと思うのですが、二つ論点があるように思いました。私たちのように、モノと遺跡のほうで、土地というものを見ながら歴史を見ていく時に、そういうものが流動的だという見方が一つですね。モノのように自由に動き回って、それが実はネットワーク社会の中で生きているし、もつといえ、モノだけじゃないですね。このごろ知られていることを含めて言えば、きょうの濱名さんのお話も多分そうだと思いますけども、いわゆるソフト的な情報そのものも実は全国ネットワークの中で、非常に多くの情報が行き来して、世の中が動いていることがよく見えたというように思います。

したがって、そういった全国レベルでの流動的な、あるいはそれを流動といっているんでしょうか。ネットワークを前提として見る、そういう日本列島というものが、近ごろの中世史の中でも重要な論点だろうと思います。

一方で、本拠という土地に根差した部分とはいえますと、それぞれ土地ごとの、先程出てきていたような、それまでの歴史的な背景とか、イエといいますが、人が持っている歴史的な背景、思想といったものに根差した形で土地とくっ付いているいろいろなものがまた生かされているという、そういう動く部分と逆に動かない部分という二つのものがどうもありそうだという、そういう見方がもう一つあります。

千葉氏の例でみれば、本貫の下総国だけではなく、大隅国、伊賀国の守護でもありました。また肥前国小城郡の総地頭で一族を出しています。



当然それらはいつもネットワークで結ばれ、京都、鎌倉、博多などに屋敷を持つていた。御家人レベルでもそれらを往き来して成り立っていたと言えます。

そういうものの列島規模でのハブとなっているのが、京都と東の武家の都鎌倉であり、中世になって東国にもうひとつの政権都市が出現したことが大きいと思います。やはり都市が持つていた機能というのは、その両方を兼ね備えているのですね。例えば、先程鎌倉を例にしましたように、鎌倉に実際には住んでないかもしれないが、あそこに本籍があるような形で語られる。なぜかといえば、幕府を中心として鎌倉という都市が持つていた機能性によって人が結び付いていて、そしてそこに、いわゆる領地ではない形でいろんな人たちが集まってきて機能しているのだと。そしてそれは物のハブでもあるし、情報や金融のハブでもあるしという、そういう言い方ができるのではないかというように思います。

またそうした拠点となる都市が、鎌倉のような関東に一個しかないような形ではなくて、どうも全国津々浦々に、都市的な場所というのが成立してくる、そういう所が鎌倉のミニチュア版みたいな形で、やはり人と経済そして当然のことながら情報というものがそこに集まるようになっていき、それを求心力に人もそこに集まってくるという、従来のような形で権力拠点とか、あるいは武家政権所在地とかいうものだけで語れないし

見られないような状況が今、議論されているということでしょうか。

さらに、先程追加していただいたことからいえば、それは決して日本列島という枠に留まらないということが、もう一つの大きな特徴で、少なくとも中世になると、博多と寧波のように東アジア規模でそういう同じような都市ネットワークが流通や金融、文化や情報など全般に機能しているのだというふうに見る、その視点もすごく大事なことだろうと思います。

そんなことを思うと多視点が必要で、中世史の人ともいろんな研究会やりながら語っているのですが、もう学際的に研究を行うということは当たり前になってきています。考古学だけでは駄目だし、文献史だけでは駄目だと、様々な学問をみんな援用して、一緒になって議論しないと今のような歴史史というのはいくらも語れなくなってきたんじゃないかというように、あるいはもうちょっと頑張らなくてはという思いでもあるというところを感じています。

山田 ありがとうございます。本日は、中世国際社会の中の東日本、千葉と、大変豊かな広がりを持ったお話を伺うことができました。いったん、私のほうからはここで閉じまして、総合司会の外山先生にお渡ししたいと思います。

外山 それでは先生方、ありがとうございます。あらためまして、三人の先生方へ拍手をお願いいたします。

ありがとうございます。それでは、本日の最後となりますが、この本講座の共同開催となっております千葉市から、当千葉市立郷土博物館館長、天野良介よりごあいさつ申し上げます。

閉会挨拶

天野 良介（千葉市立郷土博物館館長）

千葉市立郷土博物館の天野でございます。本日のお二方のご講演、及びクロストークをお楽しみいただきましたでしょうか。

千葉市と千葉大学との共催の形で開催をさせていただいております本公開市民講座も本年度で七回目となりました。これまでと同様、本会場にて開催させていただくことができましたこと、千葉大学さまの御理解と御配慮の賜物と感謝申し上げます。次第でございます。

また、今回貴重なご講演を賜りました、仏像研究家・茂原市市史編纂委員 濱名 徳順先生、国立歴史民俗博物館名誉教授 小野 正敏先生、また、意義深いクロストークを進行してくださいました千葉大学大学院人文科学研究教授 山田 賢先生、開催にいたるまでの準備をお進めく



ださいました千葉大学大学院准教授 久保 勇先生を始めとする、大学事務局関係各位に、千葉市を代表いたしまして衷心よりの感謝を申し上げます。次第でございます。ありがとうございます。

さて、今回の公開市民講座のテーマでございますが、本館がここ数年の方向性としております、東国に土着する質実剛健な「在地領主」として理解されがちであった中世武士団の「在り方」や「文化

的環境」を、中央政権との密接な関連性のもとより、海を越えた東アジアの動向とも関連づけ俯瞰して捉え直そうとする試みの一環として設定したものでございます。就中、東国武士の典型とされる千葉一族もまた、そうした動向とは無縁ではないことを、講師の先生からの素晴らしい御講演からご理解いただけたものと存じます。本講座を通じ、千葉氏と房総中世史の新たな視野をお持ちいただけましたら幸いです。

さて、千葉市は令和八年度を「千葉開府九〇〇年」と位置付け様々な事業を展開して参りますが、本館では千葉氏の活躍した「中世」展示の充実、及びこれまで実現していなかった「通史展示」具現化を図るための「展示リニューアル」事業、今後の千葉氏研究に資する根本史料とすべく『千葉氏関係史料集（仮称）』刊行に向け、現在着々と準備を進めているところでございます。従いまして、詳細な日程は追ってとなりますが、令和六年度後半から翌七年度前半にかけての約一年の間は本館も全面的に閉館とせざるを得ません。それに伴い、次年度は特別展・企画展開催もございません（「千葉氏パネル展」は開催予定）。

その代わりと言っては何ですが、年明けの一月十六日（火）より三日（日）の会期で、特別展『関東の三十年戦争「享徳の乱」と千葉氏―宗家の滅亡・本拠の変遷、そして戦国の世の胎動―』を開催いたします。本展を通じて、「享徳の乱」と連動して惹起した千葉氏宗家の滅亡と本佐倉への本拠の移動が、従来千葉氏衰退の表れとしてとらえられてきたことを見直し、新たな時代に飛躍するための千葉氏の積極的な動向であることをお示しすることを狙いとしております。提示される「シン千葉氏」の姿に是非ともご期待ください。今後とも、本館の活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、地域史研究の今後の益々の発展、ご出席くださいました皆様のご健勝を祈念いたしまして、言葉整いませんが結びのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

令和5年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

東アジア文化の受容と千葉氏
—妙見像と貿易陶磁器からみた文化と権威—

令和6年3月発行

発行 千葉市・千葉大学

編集 千葉市立郷土博物館

千葉市中央区亥鼻1-6-1

印刷 株式会社 世広